LINKAGE ブックレットシリーズ

島と語る 01: 琉球弧・与論島

高橋そよ 編

LINKAGE Booklet Series

Narratives on Islands 01: Yoron Island in the Ryukyu Arc

LINKAGE ブックレットシリーズ

島と語る 01: 琉球弧・与論島

高橋そよ 編

はじめに……2

言い伝えを未来の糧に　喜山康三……4

あるサワラ曳き縄漁師の話　高橋そよ……36

与論島の方々のお話——座談会　盛口満……46

与論島麦屋の暮らし——佐藤為宜志さんのお話　安渓遊地・安渓貴子……90

伝承の中の生物たち——与論島から与那国島まで　安渓遊地・安渓貴子……112

LINKAGE Booklet Series

Narratives on Islands 01: Yoron Island in the Ryukyu Arc

はじめに

島々の人と自然の関わりを学ぶ上で、地元の方々の語りの聞き書きこそは、すべての基盤となるものです。それは、自然科学にとっての実験データ、歴史学での書かれた史料がもっとも大切であることと同じです。いま、世界のいたるところで、言語と暮らしとそれらをとりまく自然そのものが大きく変貌する中、自然とともに生きる知恵の伝承が途切れて永遠に失われようとしています。その知恵と経験を、子どもや孫の世代に引き継ぎたいと願う島の人たちの思いに共感して、私たちは、このブックレットを作りました。それは、島からおあずかりした宝物をきちんと島にお返しする第一歩なのです。これがひとつの呼び水となって、涸れかけた伝承の泉からふたたびこんこんと水が湧き出す日を、私たちは夢見ています。そして、地域の方々が経験を共有し、互いに励まし合いながら、その宝物である知恵を記録・継承していけるような、島々の新しい関係性を築くお手伝いをしたいと願っています。

このブックレットはまた、人間文化研究機構総合地球環境学研究所の LINKAGE（リンケージ）プロジェクト・生存基盤ユニットのメンバーと島々の人びとの対話から生まれた語りを綴るものでもあり、私どもの学びの出発点であると考えています。

The fountains of narratives

Narratives are the most important basis for our study on the relationship between humanity and nature of the islands. It has the same value as scientific experiments or historical documents for all the natural and human sciences. The tradition of orally narrating the wisdom of co-existence of human activities with nature is rapidly disappearing everywhere in the world. This is because of the recent drastic changes in traditional lifestyles, languages, and the natural environment itself. We sympathize with the wishes of the island dwellers that are making efforts to hand down their traditional environmental knowledge (TEK) to the future generations, and we have collaborated with them to compile this booklet. This is one of the first steps to return the island heritages to their birthplaces, which have been often removed in the name of scientific researches. We dream of a day when the island traditions will revive; and the children and visitors can enjoy the drink from the fountain of the local wisdom and experiences.

This booklet is based on the dialogues between members of the Community Capability Unit of the LINKAGE Project at the Research Institute for Humanity and Nature (RIHN) and the people of the islands. Hopefully, we may share our experience for a new network of the islands, in which local peoples can encourage each other to make records of their traditional treasures.

出典：国土地理院ウェブサイト https://maps.gsi.go.jp/

言い伝えを未来の糧に

喜山 康三

はじめに

先輩や友人、知人の方々から先祖や屋敷、姓、土地所有や縁戚関係などいろいろな話を伺(うかが)い記録してきました。すると、一部ですがそこには宗教的な結びつきなど様々なものが窺(うかが)われました。

それぞれの方の語らいや、現在の慣習や言葉の違いなどを辿ると、与論島が大惨事に見舞われた自然災害や様々な歴史の断片が刻み込まれていることに気づきました。文字の記録にない歴史が、昔が、ダイナミックに蘇ってくる気がします。

先人が歩んだ道を手繰(たぐ)り寄せると生きる糧を恵んでくれる気がします。聞き伝えられた話をできるだけ早く、沢山記録したいのが私の希望です。突然話を伺いにお邪魔します。その節はよろしくお願いします。

ご意見等お寄せいただけたらなお嬉しいです。ありがとうございます。

郵便二郎はサバニとともに

長らく与論島と沖永良部島間の郵便物輸送は、サバニが担ってきた。サバニは帆と櫂で両島間五〇数キロを数時間で航行した。第二次世界大戦が始まる一九四一（昭和一六）年頃まで海人（ウミンチュ）が郵便輸送の重要な任務を担っていた。

サバニ所有の漁師が逓信手の肩書で船長の役目を担い、別の漁師を助手にして二人で搬送していた。強風と波に叩かれ煽られるため、船員帽子のクバ笠は鋭角で小さく頑丈に作られ、蓑で波風はしのいでいた。

船尾で帆や舵を操る船長と、船首でもっぱら漕ぎに専念する助手。荒れる海を幾度となく乗り越えてきた。二人の海人はいつしか「郵便二郎」の愛称で呼ばれていた。

元与論郵便局長、永野平治氏は二人が沖永良部を出発した報せが届くと、岬に立ち、日が暮れるまで海を見つめていた。二人が荒波を越え一路、与論島に向かっていたある日、永野氏の不安が現実となった。逆巻く波頭に船影を追うのだがリーフに砕ける大波でとぎれとぎれになった水平線が目に映るだけだ。

「遭難だ！」二人の面影を思い出しながら「なぐりさぬ（かわいそうに）、なぐりさぬ」と静かに、

寂しそうな声で何回もつぶやいていた。永野氏は静かに語ってくれた。「サバニが出発したとの電報を受け取ると、到着する頃には近くの別れ岬に上り、いつも安否を確認していた。白波に覆われ、荒れ狂う海を見る時の辛さ、波間に船影らしき黒点を見つけた時は安堵した。島をたつ時も岬に上り、黒い帆が波間に消えるまで見届け無事を祈っていた。」

その後、二度と郵便船の遭難が起きることはなかった。永野氏は間もなく病いで旅立った。与論島の郵便史について多くの聞きたい事を残したまま。

郵政関係者は戦時中には郵便物やモールス信号器、発電機の壕への移送や穴を掘り埋めるなど戦災を避けるため大変な苦労をした。殉職した「郵便二郎」と貢献された亡き方々に感謝と哀悼の意を伝えたい。

（二〇一八年七月四日）

夕映えの特攻花

与論島茶花湾に広がるアガサ浜は、学校の授業が終ると、子どもたちが三々五々集まり、時を忘れて遊んだ場所だ。

春が近づいた頃、時に「グージャーが来たぞ！」の叫び声がした。私たちは一斉に遊びを止め、夕日に手をかざしながら、リーフ沖の潮吹きに目を凝らしていた。図鑑で見たキャッチャーボート

が現れると、時を待たず鯨の潮吹きは消えた。
天気の荒れた日には波に向かって「ウシュコレ（潮を食べなさい）ピーコレ（太陽を食べなさい）ナーン（波）ナーン」と大声を出しながら、押し寄せる波から逃げ、返す波を追いかけ遊んだ。「沈む太陽は海に食べられている様子だ」と古老に教えられた。「祖父が亡くなると夕日がお供する」という話を聞いたこともある。
波打ち際の子どもたちの群れに一艘（そう）の帆掛けサバニが勢いよく突っ込み浜に乗り上げると、子どもたちは船倉の飛び魚を目がけ両舷（げん）から一斉に襲いかかる。漁師はハエを追い払うように、左右に櫂（かい）を振り回すが、子どもたちは巧みに獲物を失敬する。
両手に飛び魚を持ち「魚を釣ってきたぞ！」と勇ましくかざしながら帰ると「ウシャギムヌデル（授かりものだ）、次も豊漁になるからいいよ」と、母は笑いながらとがめる事はなかつた。
砂に足を取られながらアガサ浜を見下ろす砂丘の頂に上ると、黒ずんだテーブル珊瑚を積んだ碁盤目の石垣と墓標群が現れる。そこはアダンとリュウゼツランに囲まれていた。
傾き二つに折れた竹竿は葬送旗の名残だ。傍らには崩れかかった木造の小さな家形の祠（ほこら）が建ち、その下には洗骨を待つ遺体が眠っている。周りには赤と黄色の小さくかれんな花がひしめいていた。
「墓にあるから墓花なの？」と父に尋ねると、「あれは特攻花で、アメリカの軍艦に向かった特攻兵が飛行機の窓から投げた花が根付いたものだ」と、舞い散る花束と特攻の様子を交えながら花の生い立ちを教えてくれた。

特攻兵は夕日に召され、特攻花は生きながらえて最果ての地から戦の哀れさを今も伝えている。

（二〇一八年八月九日）

与論島の古謡、古事記と「ゆんぬ」

〈ゆんぬちゅるしまや（与論は）いにくさや　あしが（小さいけれど）なびぬ　すくなかに（鍋の底中に）ぐくぬ（五穀が）たまる（溜まる）〉。この与論島を賞賛した古謡を初めて聴いたとき、なぜか素直に心に響かなかった。

島を讃え豊かさを表現するのにいくら何でも「鍋の底中」はないだろうと感じたからだ。歌詞に対する疑問が湧いてきた。この歌が「宴席で何らかの拍子に作られたのではないか」「あるいは何かの場面の言葉の誤用や借用ではないか」と考えるようになってきた。

与論島ではくしゃみが出た時、「クスコレ　パナ」（くそ食らえ鼻）や新築祝いの「グージャーワンサマ　シンパッタナゲーリ」（鯨がのたうち回って）など、その事象とは直接関係ない言葉が使われることを思い出した。お経や祝詞では難解な言葉が他の言葉に変えられて、予測のつかない形になることがある。もちろん意味は通らない。この古謡にも同じことが起こったのではないか。

この歌が出来た背景に「ゆんぬ」という言葉があるのではないだろうか。与論島の別称「ゆんぬ」

は名詞の「ゆん（五穀豊穣を表す）」と、助詞の「ぬ（の）」が結びつき、島名として独り歩きしたと考えると、この歌の見方が変わる。与論の別称「ゆんぬ」はそもそも存在していなかったのではないか、と。

私はこの歌の「鍋の底中」の出生を古事記に探すことができると思っている。「少名毘古那神（スクナビコナノカミ）は海のかなたの……この時、海上を照らして近寄ってくる神が……」。この場面は与論島地主神社に祭られている守護神の話と酷似している。古事記にある「スクナビコナノカミ」が語呂音わせで前後が入れ替わり「ナビヌスクナカ」となり、与論の別名称「ゆんぬ」が作られ、元は神様の名前が「鍋の底中」になってしまったと。与論は「豊穣の島」「神の島」であった。次回も島の古謡について考察したい。

（二〇一八年九月七日）

「ゆんぬ島」が生まれた話

前回、「ユンヌ」は「与論島の別称かどうか疑問がある、そして、ナビヌスクナカはもともとは古事記に出てくる神様の名前で、この古謡は何らかのお経や祝詞ではないかと考えられる」と述べた。

ユンヌの「ユン」は沖縄の有名な民謡、安里屋ユンタの「ユン」と同じで、五穀豊穣の意味があ

ると言われている。本来は「ユンのウタ」（五穀豊穣の唄）でユンタをローマ字にすると「YUNNUUTA」となる。続くNUが縮音し「ユンタ」となったと考えられる。

奄美の地各（宇検村の湯湾、瀬戸内町の油井トンネル、与論の「ゆ浜」）などに「ゆ」が多いのは海幸山幸（豊穣）を意味していると推察する。雨にかかわる方言にも「軒」（ゆるい）のように「ゆ」がある。世果報の字をあてる「ゆがふー」もそうである。漁労のとき、船底の淦（あか）を「ゆー」と呼んでいる。これらの由来については機会を改めて考えることにしたい。

沖永良部島の方は自分の島を「はなしゃる島」（愛しい島）と表現し、与論では「ゆんぬ島」（五穀豊穣の島）と使う。いずれも自分の島を誇る言葉だ。「はなしゃる島、与論」あるいは「ゆんぬ島、沖永良部」と使ってもなんら差支えはなかったと考える。

長い間、与論島の歴史、方言の文献や沖縄の文献を調べたが「ナビヌスクナカ」の意味や出所が分からず、諦めかけた頃、何とはなしに読んだ古事記の一節に釘付けになった。古謡を古事記の場面にトレースすると、本来の意味は「スクナビコナノ神様、あなたの御魂を鎮め祭りますので、この小さな島を五穀豊穣の島にされるよう、お祈り申し上げます」という祝詞（ゆんぐとう）となる。これが何かの拍子で今に伝わる与論の古謡になったのではないだろうか。

ユンとヌが結び付いて、いつの間にか与論島の別称になった。実に愉快で楽しい「ゆんぬ島」が生まれた話でした。

（二〇一八年一〇月一〇日）

漢字の「左」と、与論方言「ナー」

与論島の方言で介助することを「ナー」と言う。旅先でふと手にした「漢字の起原」（加藤常賢著、角川書店）をめくるうち、「左」の字に目が留まった。本書によると、古代中国では介助することを「ナ」と言っていた。左は右を介助する意味を持つことから左字の「ナ」偏は古代中国語で左を意味する「ナ」に由来するとの説明があった。

そのとき私は、「与論島の方言に漢字の成り立ちを発見した」と、まるで金塊でも掘り当てたような感慨を覚えた。

幼い頃、祖母が重たいものを両手に持ち歩いていたことがある。その様子を見た母に「ぺーくいじ　なーなしば」と言われたことがある。「早く行って、介助しなさい」の意味だ。

与論の方言で「ナー」はまさに介助の意味だ。漢字を習いたての頃「漢字の書き順には意味がある。形が似ていても書き順を間違えてはいけない」と先生に言われたことがある。

サンシン（三線）を覚えたての頃、父に「音階（左指）は気にするな、声を出して歌うこととリズム（右）が重要だ」と教わった。サンシンを初めて手に取った時は左指の音階に集中するが、慣れてくるとリズムや歌がしっかり身に付いていないと上達しないことが良く分かる。リズムは音階を介助している。

日も落ち夕闇迫る頃、好きな娘の家の近くで演奏するサンシンは誘い出しのシグナルだ。サンシ

ンの音色は逢瀬の応援、介助でもある。楽譜のない時代、全て自己流でリズムも音階も装飾音も人それぞれで、一つとして同じ演奏はない。そして好きな男性の演奏はすぐに分かる。

沖縄旅行の際、図書館に立ち寄り、「介助」に関する方言を調べてみたが、どの方言辞典でも探すことは出来なかった。もしかすると消滅した言葉の一つかもしれない。

漢字の「左」は与論方言の奥深さを教えてくれた。

（二〇一八年一一月九日）

この世も、あの世も「極楽」

故町田原長氏の著書『与論島の民謡と三味線楽』に「月ぬ　世んてぃゆい　影ぬ世んてぃゆいさんか　みじらしゃや　忘りぐるしゃ」という古謡がある。この歌詞はあの世の人がこの世を懐かしんで歌われたもので「月の夜も照り、影も照りサンカは楽しくて忘れ難い」と説明されている。

歌詞の「月が照る」は理解できるが「影が照る」は不自然だと思い、古語辞典を調べた。「てぃゆい」は「暮れる」の意味で使われていることが分かった。「月の世も暮れ、影の世も暮れサンカは楽しく忘れ難いものだ」と説明を変えればどうかと思う。光も音もない深い闇とすべてが凍（い）てつく寒い死の世界を表しているのだろう。

青年が夜遊（やゆう）した後、帰り道に奏でられる「道イキントー」という曲がある。この中で歌われる歌

詞の一つだ。道イキントーが奏でられた後、三味線を弾くと幽霊が出ると言われる。そんな物悲しいメロディーは、何か意味深なものを感じさせる。

「サンカ」の意味について父に尋ねたが知らなかった。しかし、父から教わった改葬、洗骨する事を「サンカ　パダ　アーチ」（現世の肌を削ぐ）という言葉を思い出した。現世からあの世への離脱として使われている。新生児を初めて太陽の光に当てる（拝む）事を「サンカ　ウガマシャン」という。そうしたことから、サンカは太陽、現世の意味であることが分かった。あの世から現世を慕い、亡くなった方への敬いが込められている「極楽」の意味であることが理解できる。

相対的に、「あの世を称えた表現があるか」と考えたとき、風葬墓を「ハンシャ」と呼んでいることを思い出した。恐怖の代名詞であったハンシャは実はあの世を称えた呼称だと気が付いた。死者は現世をサンカと呼び、生者はあの世をハンシャと呼び互いに称え合っているのだ。古謡は生死の境を超えて生きる力を伝える、そんな気がする。

（二〇一八年一二月一三日）

ことば検定とウンワラビ（海童）

林修の「ことば検定」は私が楽しみにしているテレビ番組の一つだ。中でも記録を進めている与論方言につながる言葉が出てきた時はなおさらにうれしくなる。過日、放映された魚の「ほうぼう」

の名前の由来は鳴き声とのことだった。与論島にホウボウに関わる伝承があるので紹介したい。

与論ではホウボウを「ウンワラビ」（海童）と言っていた。漁師がクリ舟で漁に出かけるとき必ず携えるものがある。ウンパフ（海箱）だ。それは幅五〇～六〇センチ、高さ二〇センチ、奥行き三〇センチ程度の弁当箱に似た木箱だ。中には芋、釣り道具、たばこなどが入っている。万が一、遭難したときの救命浮き代わりにもなっていた。さらにその他に、重要な役目があった。

それは時々釣れるホウボウを入れるためだ。当然、他のいろいろな魚が釣り上げられるがホウボウだけは泣（鳴）きだす前にウンパフに閉じ込める必要があったからだ。

理由は海神はウナイ神（姉妹神）のため、ことのほか子どもの泣き声には敏感で、子どもの泣き声を聞くと怒りだす。ホウボウが泣くと、乳飲み子が泣いていると勘違いしたウナイ神は怒り、暴風を呼び、海が時化（しけ）るとのいわれがある。ホウボウを泣かしたり、泣き声を漏らすことは禁忌であった。ホウボウがウンワラビ（海童）と名付けられた理由が伺える。クリ舟に乗って漁に出て帰る時までウンパフ（海箱）は手元から離すことはなかった。

漁に出ると陸で使われる言葉とは別の言葉を使っていたようだ。例えば、包丁はページャ、雨はアマムヌ、豚は牧（マキ）ヌムヌなどと呼ぶ。以前、東北などでは狩猟する方はマタギと呼ばれ日常語と異なった隠語や忌み言葉を使っていたと聞いたことがある。

与論の漁師も同じように海を畏怖し、敬う意味で特別な言葉を使っていたのだ。私は漁師が使っていた特別な用語を「ウンジャングチ（海神口）」と呼び、収集している。次は、これについて述

べたい。

（二〇一九年一月二四日）

漁師（ヰンジャン　チュ）と赤猫（アーミャー）

前回、本土では魚の「ほうぼう」は泣き（鳴き）声が名称となり、与論島ではウンワラビ（海童）となったことに触れた。神代を辿ると、ウンワラビが本来の名称ではないかと思う。時代が進み海神の存在を必要としなくなった本土では泣き声だけが取り残されたのではないだろうか。

海神（ウンジャン）口が漁師仲間だけで使われていたためか、古老でさえ、その存在を知っている人は少なく、私は昭和五〇年代以降、新しい海神口を収集できていない。そして、本来の意味が知られることなく広く使われている海神口がある。今回はこれを紹介したい。

与論島の一部には「ヰンジャバル」と呼ばれる地域がある。今では使う人も少なくなったがそこで使われる方言は「ヰンジャ　ヰン（言葉）」だ。「ヰン」は日常、苦汁（にがり）の意味で使われている。「ヰンジャバル」は他の地域より半濁音がなく、抑揚やアクセントに特徴があり、単語が他の地区とは違っているのもある。これは大切な文化遺産であり、保存したいと思い音声記録をしてきたが僅かしか収集できないでいる。

海神口では海水を「ヰンジャ　ムヌ」と言っている。これから類推すると「ヰンジャ　バル」は

漁村の意味で、「キンジャン　チュ」は　漁師の意味と理解できる。昭和三〇年代頃まで続いた糸満に子弟を年季奉公に行かせることを「キンジャ　ウイ（売り）」と言っていた。海神口はユングトゥ（祝詞）や呪（まじな）いではないかと考えている。「キン」は塩の音読みで、方言の中では神霊的な表現には音読みが用いられていることが見てとれる。

方言や地名、海、自然、慣習などさまざまなものを「音」やイメージでトレースすると背景に新たな映像が浮かび新たな意味が醸し出される気がする。

今まで収集した海神口を紹介しよう。包丁はページャ、雨はアマムヌ、帆柱はパッサー、刀はシビン、船底に漏れる淦（あか）はユー、波浪はムサ、釣り糸や縄の事をカジラ（葛）、豚を牧ヌムヌ、山羊や牛馬をユーチパギ（四足）、餌をユドウという。中でも、不漁の事を「アーミャー（赤猫）」と表現しているのは愉快だ。

（二〇一九年二月二二日）

ハイビスカスと祖父の改葬

一九六八（昭和四三）年、ＮＨＫの「新日本紀行」で与論島が放映された。これを契機に若者の来島者が急激に増加した。両親が経営する民宿を手伝っていた頃、耳元に赤いハイビスカスを飾った女学生が宿に帰って来た。それを見た母はショックを受けた様子で「今の子どもたちのすること

は……」とあきれたような言葉を私に投げかけた。私にその理由が判ったのは随分後のことだ。

方言や地名等を記録しているとき、花を忌み嫌ういわれがあることがわかった。明治生まれの母にとって花は忌避そのものだった。屋敷の周りには花は植えるな。真っ赤なハイビスカスは特に嫌われ、「グショウバナ」（後世花＝あの世の花）、や「トートゥバナ」（葬儀・祭祀に使用される花）と呼ばれていた。「パナ　チチェーボ　ヌチベーサン（花を慈しむと命が短い）。パナ　ナイヤ　トゥガ　ヤ　ネンヌ（花に罪は無い）」。どこに咲いている花でも摘み取る事は許され、むしろ勧められた。

一九六〇（昭和三五）年、母方祖父の洗骨があった。早朝に起こされ前日に用意した雨傘やスコップなどを持って出かけた。暗い夜道、父にトートゥバナを取るよう言われ道端のハイビスカスを数本折って持って行った。墓に着くと木造の屋形はすでに無く、祖父が埋葬されているあたりに家族、親戚全員が屈む中、父が何かしら祈っていた。

掘り出しが始まるとすぐに祖父の頭蓋骨が出てきた。父は笑みながら「祖父のハタサー（頭蓋骨）だ、君がきれいにしなさい」と手渡された。電灯の明かりに浮かぶこげ茶色の頭蓋骨に一瞬、怖さを感じたものの、安らぎにも似た不思議な気持ちになったことは今でも忘れることができない。

夜も明け、日が差すと傘を広げ太陽の光が祖父に当たらないように抱きかかえた。遺骨は足元から先に骨壺（こつつぼ）に収められ、上半身、最後にハタサーを置き白い布で覆い、骨壺の蓋（ふた）を閉じた。墓地を後にするとき、ふと振り返ると母が墓前にハイビスカスを手向けていた。（二〇一九年四月四日）

自然の奇跡、百合ケ浜

与論島はサンゴ礁のリングに囲まれた島だ。海岸線に沿うように裾礁（きょしょう）が広がり、青と白のコントラストに映える堡礁（ほしょう）へと連なる。島から少し離れたリーフの上に浮かぶ百合ケ浜は、エンゲージリングにはめ込まれたダイヤモンドのようだ。美しい不思議な浜はあの場所にどうして出来たのかその理由を知りたい衝動に駆られた。

県道茶花線を城跡に向かう途中、立長字にイナパゴーがある。与論町最初の水源地である。そこは「底なし沼」と言われ、落ちた人は伊平屋口（イピャーグチ＝茶花港水路）に浮かんでくるという物騒な伝承があるほど水の豊富な場所だった。

伝承を知る数年前、ある調査技師から「茶花港水路の海底には断層痕と思われる巨大な深い溝が外海に向かっている」と教えられた。科学的な知識や情報もない時代、イナパゴーと伊平屋口には何らかのつながりがあることを先人はすでに見抜いていたのだ。

その後、地質調査専門技師と知り合い、私は与論島の航空写真を見せながら水路の断層痕の話をした。彼は「水路の断層はイナパゴーから高千穂神社北側の断層へと続き、大金久海岸南端につながり、百合ケ浜近くを通っている」と教えてくれた。そのとき、大金久海岸南端には枯れることのないパマゴー（浜井泉）があることを思い出した。

こうして島の西側にあるイナパゴーと東側にあるパマゴーは一つの断層でつながっていることが

判った。それぞれが地下に水盆（自然の地下ダム）を持ち大量の地下水を湛（たた）えていることも。そのため、この二つの井泉は有史以来枯れることはなかった。

二つの水盆は海側に大きな礁湖を抱え、礁湖の海底地下に水盆を共有していると思われる。そして、礁湖の縁であるリーフが周囲より若干落ちているのが観察できる。

この偶然が百合ケ浜誕生と地下水豊富な島を造り上げた理由と私は考えている。自然のいたずら、奇跡は大きな遺産を私たちに恵んでくれた。

（二〇一九年五月八日）

ヨーグルトと宮森小学校米軍機墜落事故

一九五五（昭和三〇）年、アメリカ上陸舟艇三隻が大きな扉を開いて茶花海岸に乗り上げてきた。私たち茶花幼稚園の園児は浜に並ばされその後、船に招かれた。米軍兵が私たちに柔らかいコップを渡した。そこに注がれた白い汁はこれまで味わったことのない、おいしさだった。天にも上るような心地がした。ヨーグルトだったと思う。

当時、父が町の消防団長をしていたこともあり、火事や事故、遭難の出来事は幼い頃からよく耳にしていた。その舟艇は島の沖に墜落したアメリカのジェット戦闘機の残骸回収に来ていたのだ。戦闘機は東の空から真っ赤な火の玉を引きながら中学校の上空を通り、西の海に突っ込んでいった。

校庭には金属の破片や火の粉が雨あられのように降ってきた。近くの畑には操縦席やガラスが燃えながら落ちてきた。当時、小学二年生だった兄は私に自慢げに話していた。

父は数日の間、アメリカ艦艇に同乗して漁師と日本人通訳の仲立ちをしていた。戦闘機はハキビナ湾沖に墜落しパイロットは漁師が助けたようだ。漁師はお礼にパラシュートをもらったと話していた。

父は親子ラジオも経営していた。その関係で私は早朝から夜中まで沖縄民謡と歌謡曲番組そしてニュースを毎日聞いていた。与論上空でのアメリカ戦闘機墜落事故の四年後、記憶も薄れようとしていた五九年六月三〇日、沖縄の小学校にジェット戦闘機が墜落し大惨事が起きたニュースをラジオで知った。同世代が犠牲になった悲惨な事故は悲しかった。

この年になり、与論島の米軍機墜落事故を思い出した。墜落した飛行機は当時の最新鋭機で、その部品はすべて持ち帰らなければならなかった。父は戦闘機の先端は丸くサメのような口が開いていると話していたことから、沖縄の宮森小学校に墜落したのと同じ型ではないのかと思った。

もし、与論での墜落事故の原因を調べ、機体を改善していたら、宮森小学校米軍機墜落事故は起きなかったのではないだろうか。六月になると、ヨーグルトの甘さとともに、二つの米軍機事故を思い出す。

（二〇一九年六月一二日）

船魂に召されニライカナイへ（葬送と航海）

絶海の孤島といえども、打ち寄せる波は様々なユリムン（漂流物）を運んでくる。やってくるのは漂着物だけではない。文化、文明が時には悪霊を携え大海を媒体に漂い渡海してくる。閉ざされた世界に見える孤島だが遥か昔から阻む壁もなく、無防備に幾層にもあらゆるものを混沌のまま受け入れ享受し、仕打ちを甘受してきた。

一方で孤島に生きる者が外に目を向け水平線の彼方に憧憬を抱くならば、その瞬間から「板子一枚下は地獄」というケイシュウ（外海）の畏怖に囚われる宿命にある。ニライカナイを神地と崇めるのは、外海への旅立ちの困難の故であろう。果たせぬ夢と憧憬をそこに見たのである。

葬送儀礼は外海への船旅を模している。棺桶をプニ（船）と呼び、死に装束をプナギヌ（船衣）、棺桶を担ぐ棒はサバニで使うパッサー（帆柱）と決まっていた。帆柱を調達するには、藁草履を脱ぎ素足で白浜に入り、横たわるサバニから断りもなく帆柱を持ち出すのである。両端に巻いた白紙は残したまま返さなければならない。そのサバニには航海安全と豊漁が約束される。

葬送の道すがら沈黙が求められた。葬列最後尾から「じんぷーどー　よーよーどー」と木霊（こだま）するように時折呼びかける人がいる。「じんぷーどー」とは「順風だよ」の意味だ。「よーよーどー」は「よーそろー」（注1）と同じ意味で今の方向に進みなさい、保針せよとの意味だ。「旅立つ者よ、風はあの世に向かって吹いている、迷わずまっすぐに進みなさい」と祈っている。まさに、航海中の操舵室

の場面だ。航海を模した葬送の断片は二〇〇三(平成一五)年、火葬場ができるまで継承されていた。

一九六二(昭和三七)年頃まで樹上葬があった。幕末の奄美を記録した『南島雑話』の中に出てくるスケッチとはまるで違っていた。十数メートル以上の高い岩礁の頂から棺桶がシュロ縄で吊り下げられていた。当時はノロ(女性)が葬られ白骨化するまで下げられた、ニライカナイをより遠く望むために高い所に吊り下げられたと、ノロの孫だという老婆から教えられた。帆船のマストにある見晴台のように、水平線彼方を望む。いよいよカリユシとさようならする時が来た。別れは名残尽きない、泣くのはよそう、祝ってあげよう。

(二〇一九年七月一九日)

注1　よーそろー　今の船の進行方向(方位)を保てという意味の船乗り用語。

法の下の不公平・島ちゃび(離島苦)

今から五四年前、私は旧名瀬市の高校に進学、新しい生活が始まった。楽しみの一つは映画館に行くことだった。休日の朝日館は高校生でいっぱいだった。私は西部劇に夢中になった。裁判の阻止をもくろむ悪党は判事を狙うが、保安官が阻む。銃撃戦に館内は大歓声が沸き上がった。

西部劇を見ながら与論島での出来事を思い出した。中学生になったある日、買い物に来た客と父

が店先で何やら話している。土地の境界争いの相談のようだ。聞き耳を立てていたが長居もできず退散した。「復帰前まで裁判のため、名瀬に行く必要はなかった」と父が話していた。

記録によると一九五二年の二月に現在の図書館隣接地アガサ公園に一九坪(約六二平方メートル)ほどの木造トタン葺き平屋の裁判所が建築されている。裁判が始まると、方言が飛び交い大声が外まで響き、窓の外は大勢の人だかりで「見世物小屋のようだった」と父は話していた。

戦後から一九五三年一二月に日本復帰するまで、奄美群島も西部劇と同じように巡回が行われ、判事が島々を回って法廷が開かれていたようだ。裁判内容に制約もあったようだが迅速で費用負担が軽く住民には好評だったとある。

復帰すると経済的に困窮している人を狙ったいわゆるスラップ訴訟が横行していたことを成人になって知った。父に相談に来た人も、経済的な理由で奄美大島の裁判所に行けず泣き寝入りした。

離島に住む者は法的手続きや免許更新、各種講習会の受講のため、時に島渡りしなければならないことがある。特に、医療環境は深刻だ。ドクターヘリが配備されたが、生命に危険が差し迫った状況でなければ要請できないという。

与論島の場合、島内で処置できない急患は定期船か航空機で沖縄に行くことが多い。飛行機の空席はあるか。病院は受診できるのか。悪天候による欠航はないか。当事者にすれば人生を左右する問題だ。

離島に住む者は今も経済的、精神的負担を強いられている。これも「法の下の不公平・島ちゃび

（離島苦）」の一つだ。

（二〇一九年八月一六日）

カタカナの手紙

小学生の頃、ＰＴＡで母が学校に来ることが嫌だった。母が婆（ばあ）さんに見えるからだ。恥ずかしい思いをしたので、母に「ＰＴＡに来るな」と怒ったが理由は言えなかった。

奄美大島の高校に進学していた頃も恥ずかしい思いをした。下宿のおばさんから渡された手紙を見ると、宛名も宛先もカタカナで埋め尽くされていたからだ。母は漢字もひらがなも書けない事をその時、初めて知った。後年、明治生まれは文字が読めなかったり、書けなかったりする人が多いことを知った。

両親が明治生まれのため、時に奇怪と思われる貴重な体験をした。方言を学ぶ事もできた。小学二、三年生の頃、体全身が痒くてたまらず母に告げると「道路脇に落ちている鼻緒が切れた藁草履（わらぞうり）を片方だけ拾って来い」と言われた。どんな意味があるのか、聞いてみようと思ったがなぜか聞けなかった。

藁草履を拾って自宅に戻ると、母はタスキ掛けで待っていた。すぐさま便所に連れていかれた。当時の便所は離れ小屋でポットン式、戸板も付いていない。母は私を裸にすると、準備してあった

藁束に火を点け、拾ってきた藁草履に塩を擦りつけ炎の上で大きな輪を描きながら「～やんめー（病）うぷしま（大きい島）ぴゅーしま（広い島）かてぃ（へ）ぱい～（行きなさい）」の呪詞を唱えながら私の体全体にその汚い藁草履の塩を擦りつけるのだ。痛みとおかしさが混じり思わず泣き笑いした。

医者はおらず、薬もない時代、一週間も生死をさまよう高熱に襲われながら母の手当てで生還したことがある。病弱とヤンチャのお陰で様々な病気や怪我の治療法を経験し、一命をとりとめた事は一度や二度ではない。

母の口癖は「両手のひらに乗せられるほどの未熟児で、けがだらけの君がよく生きてくれた」だった。その言葉を時折思い出す。数え四二歳で私を生んでくれた母に感謝の気持ちを伝えたことがあったのか、と後悔するばかりだ。

（二〇一九年九月二〇日）

初恋

一九五六（昭和三一）年、私の小学一年の出来事が時々思い出される。かやぶき屋根の校舎は板壁で二つの教室に仕切られ床は土だ。そのため机と椅子はいつもガタガタ動いていた。

授業中、突然の土砂降りで教室に雨が流れ込んでくると、足首まで泥水に浸かった。幸いとばか

りに両足で泥遊びに夢中になっていると横から教科書が泥に落ちてきた。慌てて拾い上げ制服の裾で拭きながら上目で教壇を見上げると担任の先生が微笑んでいた。

家に帰っても先生の優しい笑みを思い出した。先生に会いたくて学校に行くのが楽しくて仕方がなかった。病弱だった私は「具合が悪くなったらいつでも先生に告げて帰ってきなさいよ」と母に言われたことを思い出した。

早速、実行することにした。机にうつぶせになっていると、しばらくして先生が横に来て額に手のひらを当てながら「具合が悪いの?」とつぶやいた。仮病のつもりが私はそのまま寝入ってしまった。

気が付いたら先生におんぶされて送られている。道中、通りすがりの人が私の事を尋ねていた。先生のぬくもりと香（かぐわ）しさが体中に伝わってくる。先生は私の様子から既に仮病だと分っていたと思う。「二年生になったらもっと勉強しなさいよ」と先生に言われ、意気込みながら新学期を待った。

進級の日がやってきた。金属音の甲高い三点鐘が鳴ると、全校生徒が急いで校庭に集まった。鐘は大砲の薬きょうを逆さに下げたものだ。全校生徒が校庭にクラスごとに整列した。列の前には担任の先生が立っている。

校長先生の横に下を向いたままの先生がいる。よく見ると、一年生の時の担任の先生だ。時折、ハンカチを目頭に当てている。「何かあったのか」と不安になった。校長先生のあいさつが終わると、

「秀子先生が結婚のため…」。頭の中が真っ白になった。家に帰ると兄や姉から「秀子先生と結婚できないね」とからかわれた。

母だけに打ち明けていたのに……。おしゃべりな母が嫌いになった。（二〇一〇年一〇月二四日）

ヤー普請で学んだ先人の知恵

二十歳の頃、父に「ヤー（家）普請に行って来い」と言われた。親戚の新築には普請する習慣がまだ残っていた。それ以来、大工のまねごとが始まった。

古民家を修理して驚いた事がある。杉の柱は朽ち壊れているがシャーギ（イヌマキ）やイーク（モッコク）は虫食いでハチの巣状になっているが頑丈で壊れていない。古民家は取り壊しても柱は使い回しすると言われている。強靭（きょうじん）なのだ。

屋敷を開くときは地勢、地形を考慮しながら場所を選定して決める。周囲には福木を植栽し石垣を巡らし、地面を掘り下げている。掘り下げ屋敷は防風だけでなく類焼や延焼防止の役目があり、人災への備えも怠っていない。

「井戸を掘ったら周囲に福木を植えなさい」と言われている。福木は直根のためガジュマルなどの木の根が井戸壁を壊す事から木根侵入を防ぐ地中の防壁となる。また、地下に埋め込む柱がわり

ともなって地震による井戸壁の崩壊を防ぎ井戸を守ってくれると古老から教えられた。

消防団長を四十年以上も務めた父に「火事が多い時期と原因は？」と尋ねるとバンバラベー（台湾坊主）の吹く四、五月に多い」と答えが返ってきた。高床下から吹き込む風で竈の灰に埋めたウッキー（埋め火）が舞い上がり駆けつける間もなく一瞬にして全焼した事例もあったという。

古い屋敷には「ヒンプン」やそれに代わる生け垣などが多く見受けられた。屋敷に吹き込む風を弱める遮蔽（しゃへい）壁の働きをしている。「門は一尋（ひとひろ）（一・八メートル）以上広げてはいけない、そして直角の曲がりを造りなさい」という言い伝えがある。そよ風は受け入れ、強風を止めるいわば風のコントローラーだ。

自然災害に備えるには自然を注意深く観察する事から始めなければならない。家を造る棟梁も体の主治医も自分自身だ。知恵は繊細な観察と、それを反芻することから生まれると教えられた。

（二〇一九年一二月六日）

徴兵と聾

一九七〇（昭和四五）年、小型船舶操縦免許制度が始まり、私も試験を受ける事にした。試験会場は中高年の漁師でほとんど埋まっていた。会場は大声が響き異様に騒々しかった。教壇の試験官

が「耳の遠い方は手を挙げて？」と大声で叫ぶと、一段と騒々しくなり会場のほとんどの方が挙手をしていた。漁師には難聴が多い事に驚いた。

ある日、友人の古老が亡くなった。葬儀中に埋葬用の穴を掘るため数人で墓に出かけた。その役割は「池掘人」と呼ばれ、普通は近親者が担うが、親しいことから頼まれた。葬列が墓場に近づくとあの世への道標として藁束（わらたば）に火を灯す儀式があり、その係も担うことになった。

穴掘りを始め、一息つくとそばにあった命碑に目が留まった。享年一歳、幼子の名が刻まれていた。一緒に来た方に尋ねると、古老と娘がグラマンに銃撃され娘が亡くなり古老が大けがを負った、と教えられた。

葬儀を終え遺影を終え、老妻に娘の死について尋ねると、娘の死や夫のことを語ってくれた。その時、古老が聾（ろう）であったことを初めて知った。

「父の呼ぶ声で家の裏に廻ると突然、父に頭を抱きかかえられ竹の小枝を両耳に突っ込まれた。両耳から鮮血が吹き出し激しい痛みに襲われた。それから何も聞こえなくなった。長い間、仕事は手につかず夜は毎晩布団の中で泣いていた。」

亡き夫の世代には同じように障がいを持つ方が大勢いることを教えてくれた。砂を目にこすりつけ弱視や失明寸前になった人もいた。精神障がいの振りをしたところ、戦後は狂人扱いされ本当に精神障がいになった人の話も聞いた。

戦線から次々と遺骨が帰って来る。「万歳、万歳、英霊が帰ってきた」と島中が沸き立っている。

徴兵の足音に怯えていた父母の姿は想像を絶する。「満州に行けば広大な土地がもらえる。徴兵がない」と、満州開拓を役場職員から促される。島で生きていくためには障がい者になる道しか残されていなかったのだ。野火が広がるように聾が島中に拡散された。（二〇二〇年一月一七日）

銃弾に倒れた孫娘

戦時中の夏の日、親子三人が牛車で妻の実家に向かっていた。妻は牛の手綱を引き、夫は娘を抱き、ついてきた。妻は戦闘機の轟音と銃撃の音に驚き、道端のソテツ藪に飛び込んだ。一瞬の出来事に、耳が不自由な夫は何が起きたのか理解できず、娘を抱いたまま戦闘機の標的となり銃弾を浴びてしまった。

銃弾は娘を貫通し夫の腹部まで達していた。担架代わりの戸板は血に染まり娘はすでに息絶え、夫はかろうじて一命を取り留めることができた。

夫は自ら聴覚を失うことで徴兵を免れたが、アメリカ軍機の銃撃で生死を彷徨（さまよ）い、娘の命を失うことになった。遠い異国で起きていると思った戦争は、ある日突然思いもかけず自分自身に襲いかかってきた。「戦争は憎い、戦争はするものではない」。後年、念を押すように妻が言っていた。

夏の日が傾き始める頃、牛車の手綱を引き、娘を抱き歩む親子にどんな思いで引き金を引くこと

ができたのか、狂気の沙汰としか思えない。徴兵や志願で戦場に向かった全ての人々は「二度と戦争はするな」と異口同音に戒める。

与論町誌（旧刊）には、一九五二年の記録で二七六名の戦没者が掲載されている。与論島でアメリカ軍機の銃撃で四名が亡くなっている。その中に古里の竹井喜美里氏の子女と記録されている。

亡くなった娘の祖母は夕日が海に映える兼母浜近くに住んでいる。祖母は孫娘を待っていたが届いたのは悲痛の知らせだった。孫娘の命が奪われたのは敗戦目前の一九四五（昭和二〇）年七月一三日。優しく大切な友人は二〇一〇（平成二二）年一二月三一日安らかに逝去された。享年九六歳。

亡くなった古老（竹井喜美里・男）の友人は「昭和初期世代は徴用工となった人が多い、私も徴用工だった。一回り上の大正年代生まれの多くの男性は徴兵拒否のため、自ら聾になり、漁師を生業とするのが当時の世相だった」と教えてくれた。

（二〇二〇年二月二一日）

思い出転がる茶花通り

緩やかな下り坂の先に青く澄んだ茶花湾がある。そこにはリーフ沖に停泊している本船から艀が通う桟橋がある。

夕日に染まった茶花湾を背に荷馬車が向かってくる。商店街に品物を配達するためだ。手綱を引

いたおじさんは店先に着くと無言で品物を渡し、無言で小銭を巾着に入れる。馬の嘶(いなな)きとともに、ガタガタと鉄輪が音を立てながら次の店へと緩やかな坂を上っていく。

荷馬車の後尾に飛び乗ると、おじさんににらまれるが、ぷいと横を向く事にしていた。両足をぶらぶらさせながら、茶花商店通りの端までいつも無賃乗車だ。荷馬車はピャーヌパンタを越え、朝戸商店街まで商品を運んでいた。

荷馬車が通った後には道路の真ん中にコロコロと転がったものや団子盛りになった馬糞が必ずあった。雨の日はぬかるみ、水たまりができる。風が強い日は馬糞と珊瑚砂利が混じった粉塵が舞い上がっていた。

通りで遊んでいると、いろんな事に出合う。フィラリアに感染した男性が苦しそうに歩く姿もあった。竹竿に赤や白地の布に名前を記した籏や藁草履(わらぞうり)を吊るした葬送籏を先頭に棺桶を担いだ葬列を幾度となく目にした。ある時、白い布で覆われたわが子をおんぶした父の後から老婆の嗚咽(おえつ)が続いていた。近くに住んでいた年上の兄さんの葬列を目の当たりにしたときは怖く悲しかった。

日も落ち、辺りが暗くなると店先から漏れる電球のかすかな明かりと、月明かりが近くの広場や道路を子どもたちの遊び場に変えた。ウンガマコーレー遊びは忘れられない。一つのグループが莚(むしろ)を覆い、何人かは外に隠れる。別のグループが莚に何人入っているか当てるゲームだ。莚の膨らみ具合を見て、悪口や冗談を言って笑いを誘い、中の人数を当てる。

茶花通りを歩くと、幼少の頃の思い出が転がるように時々蘇(よみがえ)ってくる。（二〇二〇年五月一三日）

与論島探検の旅はつづく

一九六二（昭和三七）年、私は中学校に入学したとき、与論には別の方言がある事を知った。一五ページの「漁師と赤猫」の中で取り上げ、「キンジャ」は海水の意味があると述べた。

その方言が使われている地区はキンジャン・バルと呼ばれ、そこにはキンジャ・ゴー（井泉）がある。周辺は海抜六〇メートル。海岸から遠く離れた場所の井泉がどのような理由で海水と関わる名称になったのか長い間、疑問だった。

周辺には「アギタの大津波[注1]」伝承があり、与論島の九〇％が津波に襲われたと言われる。姓や地名に津波が由来すると思われるものがあり、そう命名されたと考えていた。ところが、あるお年寄りからキンジャン・バルは本来、ニジャ・バルと呼ばれることを教えられた。二つは音感が似ているため混用されていたことが分かった。

沖縄県の平安座（へんざ）島にルーツを持つ姓がキンジャ・ゴー周辺に集中している。平安座は訛ると、「ヒジャ」あるいは「ニジャ」と読める。キンジャ・ゴーは出身地にちなんで命名されたのだろう。茶花地区にも平安座島にちなんだ姓がある。多くの家の先祖が平安座島から与論島に移住した歴史を物語っているようだ。

近世のキンジャ・バルは数百軒以上の超過密街が形成されていたことが旧地籍図からも見て取れる。キンジャ・バル・キンは半濁音が使われないことなど那覇方言に似ている。一方、島の西側、茶花には明治以降役場が移設され商業地として栄えた。半濁音の国頭方言に鹿児島方言が交ざり独特なアガサ・キンが形成されたと考えられる。

有史以来、天変地異や疫病が繰り返され、島外からあるいは島内で大量移住が行われた過酷な歴史の痕跡が垣間見える。中学二年生の時、父から渡された『与論島郷土史』の一冊は探検の旅に私を誘なった。父に今までの成果を聞かせることができたら、きっと、喜んで褒めてくれるだろう。与論島探検は続く……。

（二〇二〇年五月一三日）

注1　アギタの大津波　一七七八年八月七日に大津波があり、与論島に甚大な被害を与えたと考えられる（『与論町誌 追録版』から）。

この文章は、『南海日日新聞』文化欄のリレーエッセー「つむぎ随筆21」に二〇一八年七月から二〇二〇年四月まで二〇回にわたって掲載されたものに若干の修正を加え、新聞社の了承を得て、再録しました。

あるサワラ曳き縄漁師の話

高橋 そよ

沖縄島最北端である辺戸岬から北を望むと、鹿児島県与論島が水平線上にうっすらと浮かぶように見える。与論島は、サンゴ礁を由来とする琉球石灰岩からなる「低い島」である。製糖工場ができる昭和三八（一九六三）年頃まで、与論島の主な生業は湧水や天水を利用した水田によって営む稲作や自給的な漁撈であった。琉球弧の島々の中でも、薩摩と琉球、そして鹿児島県と沖縄県という「ボーダー（境界）」を生きてきた島の人びとは、どのように自然や社会の変化と向き合ってきたのだろうか。二〇二一年一〇月、島に製糖工場ができた年に中学を卒業し、奄美を拠点とした追い込み網漁（アギヤー）の組に弟子入りした町英八郎さん（昭和二二年生まれ）からお話を伺った。町さんがご自宅の作業場で見せてくださったのは、体長一メートルほどにもなるサワラを釣る手作りの擬似餌だった。これらの擬似餌には、サワラが捕食（ほしょく）するイカなどの模様や、その弱った動きを模（も）すなど、漁師たちの自然を観察する鋭（するど）い眼差しと知恵、そして島を越えて人やコミュニティと出会いながら生きてきた一人一人の物語が表現されていた。

ホロ（疑似餌）のこと

これはホロといって、サワラ曳き縄漁の疑似餌。いろんな材料を試しながら自分で作ったものや、他の島の漁師から買ったものもあるよ。

これは水牛の角。これはビール瓶を割って、その割れた先をこすりつけて削って作ったもの。水牛の角は、水に浸けると模様が浮かんでくるんだよ、きれいに模様が。水に浸けながら、ああこれは、サワラは食うなぁと、これは釣れるかなと、自分に言い聞かせながら作るから楽しいのよ。サワラの食いがいいのは、模様が浮き上がってくるもの。

これはアクリルを削って作ったもの。こんな厚みのあるアクリルはあまりない。これは、昔、与論島の宇勝集落にあった個人が経営していた「水族館」の水槽の廃材から作ったもの。そこをユンボで壊した時に残ったアクリルを知り合いからいらんかぁと言われてね。そのアクリルをガラス屋で切ってもらって、磨いたもの。水族館、あれは僕らがヒントよ。僕の親父が一九六〇年代に釣り堀をやっていた。当時は網でリーフで獲ってきたベラなどを生け簀に入れて、クサビ釣り（ベラ釣り）

様々な素材からなるホロ（上段左から水牛の角、肉牛の角、下段右から市販の疑似餌、スプーン、マッコウクジラの歯、肉牛の角と夜光貝の螺鈿、ドライバーの持ち手と夜光貝の螺鈿、アクリル（水槽）、黒蝶貝、プラスチック板など。著者撮影）

をさせていたよ。その後に、水族館を作ったからね。

これは夜光貝、こっちは黒蝶貝。これも知り合いが作っているのをもらってきた。そして、これはドライバーの根っこに、ここにドリルで穴を開けて、中から既製品のキラキラするものを入れている。サワラの餌になる、イカの筋が波打っているような感じを現している。こういうのを作っているときは、無心になれる。無心にならないと作れないね。

これは、クワの木を使ったもの。徳之島は、クワの木をホロに使う。

僕も、徳之島の人が作っているものを真似て作ってみた。クワの根の部分が曲がっているところは、水に入れると模様が浮き出る。そして、キラキラ光るようになる。このクワの部分をくっつけるために、錫を溶かして入れるときも気をつけないと。錫の熱が冷めないうちに入れないと固まらないけれど、水にパッと入れると飛ぶから、危ない。錫を入れるタイミングを考えないと、焼けができるわけ。ここ、穴を開けているでしょう。ここにハガキでもいいので巻きつけて型を作る。その中に錫を入れる。ドロドロの状態で入れるから、入れてすぐ冷やせる状態に持っていかないといけないタイミングが難しい。かといって、固まったやつは流し込めないし、ドロドロのやつを入れるとホロの部分が焼けてしまうし、せっかくの模様が台無しになるわけよ。そこが難しい。ハガキみたいなものはきれいに巻けるでしょう。上を切れば、上から錫を入れられる。巻いたところにちゃんとくっつけて、あとから錫を入れればこういう状態になる。そうして磨けば、きれいになる。

テレビで、アフリカの牛とか角のある動物をみるでしょう、そうすると、あの角いいなぁと思ってしまう。いい角っていうのはね、模様があること。僕が水牛の角で作った、先が少しひねっているもので作っていたホロに、よくサワラが食いついたよ。でもそういうものは、すぐなくなってしまう。ホロをワイヤーにつないだつもりで投げて、そのまま捨ててしまったことが一回ある。みんな、失敗はある、僕だけではなくて。言わないだけで、恥ずかしいからね。

羅針盤と海図一つで

僕は昭和三八（一九六三）年に中学を卒業するとすぐに、お兄さんが奄美で漁撈長をしている追い込み漁の船に乗った。その頃、二人の兄は、奄美の古仁屋（こにや）を基地に漁をしていた。兄たちは、与論の友達に誘われて、五島列島の小値賀（おぢか）島まで漁をしていた。その頃はウェットスーツもなくて、裸で、ようあんな北の海まで頑張ったと思うと涙が出たよ。あそこまでよう行ったなぁ、と。

僕は古仁屋から甑島、そして鹿児島から真っ直ぐのところにある宇治群島にも行った。昔は、宇治群島はカツオ船の基地だったらしいけれど、当時は無人島だった。積まれた石垣が残っていたよ。台風が来る前の五月から六月の二ヶ月間、そこに三回ぐらい行ったな、古仁屋から。獲った魚を運ぶ船は三つあった、五トンぐらいの船と七トンぐらいの船が二隻。獲った魚は、長崎と鹿児島に持って行って売った。今思えば、僕らは、ようあんなところまで、羅針盤と海図一つで、鹿児島や長崎を行ったり来たりしたなぁと思うよ。ヤンマーの三馬力、四馬力という小さいエンジンを積んでいた。今思うと無理よ。兄が漁撈長をしていて、一人の事故もなく、大怪我をさせることなく終えたけれど、今思うと身震いをするよね。

一つの船には七名から八名乗っていた。三分の一は与論、三分の一は沖縄からで宮古島からも石

川や金武からも来ていた。それから、残りの三分の一が奄美出身だった。沖縄の追い込み漁のアギヤーが与論にも伝わって、昔は与論にも四〜五人ぐらいのグループが六組ぐらいあった。与論は漁撈が専門というよりも、農作業の合間に漁もする。与論は、ウンパルといって、海と畑の両方があって暮らしてきたからね。そこに網元のようなものがあって。その頃は、氷もない。エンジンもそんなに大きなものではないから、遠くも行けなくて、ピキ（スズメダイ）とかグルクンを取ったりするグループがあった。そして、どんどん北に上がって魚を獲っていた。与論島から沖永良部島、徳之島、請島、与路島、古仁屋、名瀬と移動しながら、魚を獲る暮らしをしていたんだ。

僕らが行った宇治群島は、とにかく、よう魚が取れたよ。グルクンから、サンノジ、コウミと呼んでいるけれど、ハギの仲間で、大きいのは四キロ、五キロよ、幅もこんなのから、こんな大きいのがね、群れている。昔はキロじゃなくて、斤（きん）で言ったから。四〇〇〇斤とか五〇〇〇斤とか、ひとあみで。グルクンのウクーよ、あれを六トンくらい一回で獲ったことがあったよ。あのスジが入っているやつ。住用の沖だったね。サバニも本船も、取れた魚を乗せて満船だった、あれはびっくりした。普段はね、カブクヤー、あれを三〇〇〇斤とったらこれはもう今日大漁だと喜んでいたからね。ひとあみで。そんなに獲れたからね。

その古仁屋から、鹿児島県の吐噶喇（とから）列島の南端にある無人島の横当（よこはて）島、請（うけ）島、与路（よろ）島、あちこち、

五、六カ所の集落に宿を借りてね。宿代の代わりに、いっぱい魚をあげるわけ。おかずになる魚を。そういうふうにあちこち宿借りて、一週間ずつぐらい追い込み漁をしていた。そしてそのあとは、また本拠地の古仁屋に戻って。一〇日ぐらい古仁屋にいて、また漁にでる。

当時は、ボンベはなかったからね。網が引っかかった時には、一番深く潜ることのできる漁撈長がワイメカシといって、重りになる丸い石、卵型の石を持って潜ったよ。上から底を見ても見づらいぐらいに深いところに網を張ることがあったから。そで網と袋網を繋ぐのは藁でくくりよった。魚を追いこんで袋網をあげる時に人の力でちぎれるようにね。

古仁屋から外海に出るだけで一時間はかかったからね、朝四時には出ていたよ。炊いたご飯をお櫃(ひつ)に入れて持っていって。お昼は手づかみで、溶かした粉わさびと、獲った魚をさばいて握り寿司を作って食べていたよ。いい魚をおかず用にとると、漁撈長に怒られるから、サバニから本船に積む前に選ぶわけよ。

それから、本船に獲った魚を積んだ後、あと一回は潜るわけ。今度はスズメダイとか、また村々で売れる魚を獲る。サバニに積んで、「ユーコンソーレ（魚を買ってください）」といって村々で売って歩く。バイラと呼んでいた竹の籠に入れて、集落の中を売って歩いたよ。売れるのは一、二

斤ずつだけど、早く帰りたいから、倍ぐらいあげてね。請島や与路島にいたときも、向かい側の加計呂麻（かけろま）島まで売りにいきよったよ。網に入る、色々な魚を売って歩いたよ。人気だったのはグルクンやスズメダイだとか。

沖縄漁師とパスポート

中学出たての丸坊主で行った最初の頃は、船酔いで大変、もう仕事どころじゃなかった。サバニのへさきにしがみついて丸まっていた。与論はその頃、高校はなかったからね。高校に行くというのは、夢にも思わなかった。沖縄はまだ復帰前だったからね、沖縄の漁師たちは、みんなパスポートを持って船で来ていた。当時は関西汽船が名瀬に寄った。沖縄の漁師たちは、名瀬から古仁屋まではバスで来ていたよ。

子育てのこと

子どもたちが小さい時には、よく船に乗せて投網の漁に行ったよ。そうすると、機転がきくよう

になる。浜に行った時に、まずは自分に何ができるか、船の中でどうすればいいか、リーフに行った時にどうすればいいか、道具はどうあつかったらいいか。できることを考える。でもいまの子供達は贅沢だよね。リールから、竿から何かも作り上げられたものを、お金ですぐ手に入れられる。壊れたら、買い換えられる。だけど、それにはお金がいる。親がお金を稼ぐわけだ。港にリールのついた竿が置きっぱなしだったことがあって、それを取りにきた子どもに僕は言ったことがあるよ。このままおいていたらリールも固まって使えなくなる。親はそれを買うために頑張ってお金を稼いであげているのだから、それを大事に使わないとだめだよ、と。

子どもたちには、言われたことを素直に聞く子に育ってほしいと思っている。周りの方々が言ってくれることを、きちんと聞き入れる。そして、それを元にどうすればいいかということを、ちゃんと判断して動いてくれれば、それが一番かなと思う。口でいうのは簡単だけどね。

二〇二一年一〇月二日、鹿児島県与論島にて

本稿は、作品展「Imagine vol.2 自然の声を聞く」（浦添市・カフェ rat & sheep、二〇二一年一二月六日〜二五日）のフライヤーに寄せた文章を改変しました。

与論島の方々のお話――座談会

盛口 満

琉球列島の島々では、昭和三〇年代を境目にして、里の自然景観と人々の自然利用の形態が大きく変わりました。その昭和三〇年代以前の与論島の里の自然景観について、人々の自然利用の聞き取りを中心にして、お話をうかがうことにしました。聞き取りにあたっては、与論郷土研究会の方々に、話者の方々を紹介していただきました。なお、与論は歴史的に沖縄島・やんばるとの交流が深いことから、聞き取りには、国頭村・奥出身の宮城邦昌さんにも同席していただきました。

聞き取り　二〇一七年六月七日～九日

麓 才良（ふもとさいりょう）さん（昭和二三年生まれ・与論郷土研究会会長）
竹下（たけした） 徹（とおる）さん（昭和一一年生まれ・与論郷土研究会顧問）
竹（たけ） 盛窪（もりくぼ）さん（昭和二七年生まれ・与論郷土研究会副会長）
竹内（たけうち） 浩（ひろし）さん（昭和一一年生まれ・与論郷土研究会顧問）

盛口：与論島でも植物を魚毒として利用していましたか？

竹下：ミミジグサ（ルリハコベ）を使いました。あと、トウダイグサ。これは畑に生えているものだけじゃなくて、ハンバラ（海岸の隆起サンゴ礁からなる石灰岩）の上に生えているものも使いました。（注1）主食を捕るという意味合いではなくて遊び半分でやりました。

盛窪：トウダイグサは、パッタイマチと呼んでいます。畑のマツという意味。そのほかにデリスもありました。

竹下：魚を捕るのに使うために、植えるということがありました。ただ、今は繁茂して邪魔になって採り払われてしまっています。

盛窪：与論ではイジュがあんまりないので、イジュを魚毒に使ったという話を聞かないです。

盛口：魚毒漁は遊び半分でやったということですが、子どもたちだけがやるものでしたか？　それとも大人もやったのですか？

盛窪：大人もやりました。青酸カリを使うようになったら、青酸カリになってしまいましたが。

竹内：臼でつぶして、海岸に持って行って、潮が引いたときにやったものです。

盛口：やんばるでは魚毒はササといいますが、与論では何と言いますか？

竹内：僕らもササを入れるといいます。

竹下：大量にササをいれて捕るだけとったあと、みんなが帰った後、でてきた大きなミーバイを捕まえたという少年がいましたね。

盛口：ササ入れをするのはいつですか？
盛窪：春ですよ。ルリハコベもパッタイマチもその頃にでますから。
宮城：やんばるの奥には、与論から伝わったという言葉がいくつかあります。ニンブーとかアンヌミーとか。与論とやんばるの交流に興味がありますね。奥にはユンヌ山という地名がありますが、東村にもユンヌ原という地名があって、どうもカヤを与論に出していたんじゃないかという事です。
竹下：カヤをやんばるから運んだというのは十分に考えられますね。構造改善事業で、カヤが生えているところが無くなってしまいました。それで、高倉を復元するときに、沖永良部からカヤを買ってきたといいます。昔はどこの家でも茅葺でした。それに結（ゆい）があったので、年中、どこかしらかの家を葺くためにカヤが必要でした。今は屋根を葺き替えるほどまとまってカヤが生えているところがないですね。
宮城：沖永良部では、トキワススキを屋根に葺いたといいます。おもしろいことに、奥ではトキワススキのことをユンヌグシチ……与論のススキと呼んでいます。
盛窪：与論では屋根を葺いたのはススキではなくチガヤです。子どもの頃、ススキは少なくてカヤが多かったですよ。ススキは箒を作るのに使ったぐらいです。基盤整備をしたあと、境界にススキが逃げ出して、今はあちこちに生えていますが。あと、リュウキュウチクは昔、貴重なものでした。

麓：リュウキュウチクは重宝しましたね。

盛窪：竹は開墾できるようなところには生えていないから、そういう余分な土地を持っているような余裕のある家の人じゃないと使えなかったんです。

盛口：昔は与論にもたくさんの田んぼがあったのですね。

竹内：田んぼは多かったですよ。天水利用の田んぼですが。それと、泉の流れに沿って、田んぼが作られていました。

盛口：田んぼが無くなったのは、減反政策が原因ですか？

盛窪：そうです。

竹内：あと、一九六三年に製糖工場ができて、キビ作に転作が進みました。

盛窪：昔の田んぼの地形を見ると、水のたまりやすいところに田んぼを作っていました。

地形との関わりも大事ですね。今は、昔、田んぼに生えていた雑草も少なくなってしまいました。

竹内：与論で田んぼが多かったところに、ウフンジュという川沿いがあります。川というか、溝なんですが。インジュとは溝という意味なので、大きな溝という意味ですね。そのウフンジュの左右が、みんな田んぼでした。ここが与論で一番大きな田袋でした。稲をつくるだけでなく、昔はビーダといって、イグサを作っている田んぼもありました。

盛口：田んぼにはタニシもいましたか？

麓：いっぱいいました。

盛窪：タニシがいなくなって、その代わりにジャンボタニシが入って。

盛口：ドジョウはいましたか？　いたとしたら食べましたか？

盛窪：ドジョウはいたけど、食べません。海釣りの餌ですね。

竹内：僕らは食べましたよ。焼いて食べたり。ただ、食べると言っても、わざわざそのために捕って食べるというより、あったときに食べるというぐらいのものでしたが。ドジョウは、ジジョウと呼んでいました。釣りの餌にもしましたから、中学のころ、ドジョウを捕って帰ると、親父が釣りの餌になるといって喜びました。そのドジョウも釣って捕ったりしました。

盛窪：ドジョウを釣るのはやったことがありません。僕らはザルに牛の糞を入れて水に入れると、その中にいっぱい入ってくるからそれをすくって捕りました。

竹内：牛の糞には集まってくる。

麓：ソテツなんですが、明治三一年の大きな台風の後、田んぼや畑にできないところにソテツやカヤを植えましょうという指導がなされるようになったということです。その後明治三五年に、今度はソテツの花に受粉をする技術も沖縄や沖永良部から入ってきたという事です。与論のソテツはそれより前、堀甚左衛門という代官が島で亡くなったときに、愛用していた盆栽のソテツを墓に植えたのが大きく成長して、それがあちこち植栽されて広がったと言われています。(注2)

竹内：その話は代官記に書いてあるんです。それが与論のソテツの始まり……と。

竹下：ソテツは土地の境目に、境界として植えられていました。葉は緑肥にも利用されましたし、奨励して植えたんですよ。それが構造改善事業で全部、土地をならして区割りをしたから無くなってしまいました。構造改善をしていないところでも、邪魔くさいと撤去してしまったところが大部分です。境界以外では、ビドウ山にソテツ山として群がって生えているとこがあります。

盛口：ソテツの葉は田んぼの緑肥にしたのですね。

竹下：田んぼに足で鋤きこむのが痛くて。中学生のころ、田んぼにはだしで入ったから。葉っぱの先もとがっているが、押切で切った切り口も痛かった。

竹内：ソテツの葉は、畑にも緑肥にしよったよ。(注3)

竹下：畑は足元をみながら作業ができるから、刺さらないようにできたけど、田んぼは足元が見えないわけ。

盛窪：昔の子供はいつもはだしだったから。ハンバラ（海岸の大岩）の上を歩くときもはだしだっ

たから。

竹内：ハンバラの上を歩いていかないと、釣りにいけないわけだから。

竹下：いう事をきかない、どうしようもない男をハンバラと言ったりしますよ。

宮城：沖永良部に行ったとき、ソテツの雄花の花粉を雌花に交配させるという話を聞きました。やんばるではそうしたことはしませんでしたが。

竹内：われわれの子供のころは、雄の花をちぎってきて、やりよったよ。自分の畑の境界に植えてあるソテツに。干ばつがくると、ソテツが食料になることが結構あったから。

盛口：ソテツの実のことは何と呼びますか？

竹内：シチチヌナイですね。

盛口：与論のように山がない島だと、昔は薪を採るのが大変だったと思うんですが。

竹下：そう。薪は与論の泣き所。与論は薪と水のないところ。薪が一番あるのはやんばるだから、釣り船で薪を買いに行ったりしたんじゃないかと思っているんです。あと、戦前、与論にある土地を売って、満州に渡った人がいます。それで戦後、満州から引き揚げてくるときに、九州に入植することになって、入植の条件は、水と薪があるところと。それで錦江町の田代町を選んで入植したといいます。

盛口：与論で薪と水に苦労をしたから……ということですね。みなさんも、子供のころ、薪採りに行かれましたか？

竹内：日曜というと、薪を拾いに行きました。木の枝を採ったり、ソテツの枯葉を採ったり。それが子供の仕事です。

竹下：薪拾いに行かされても、山もないから道端から薪を拾って集めるのが大変。ソテツの枯葉、アダンの枯葉、ススキの枯葉……こうしたものを薪にして。木の枝を拾えたら、もう最高。（注4）

竹内：シダムヌは最高だったね。

竹下：せっかく集めても、葉っぱはすぐに燃えてしまう。台所に山ほど積んでいてもすぐに燃え尽きてしまいます。今は枯れ枝があっても誰も見向きもせんけど。

竹内：草刈りも仕事だったよ。オーダをもっていって、草刈をして。昔は牛の飼料も売っていたわけじゃないから。

竹下：草を刈った、薪を採ったと言って家に帰ると、手を見せてみろと言われて。傷がたくさんあったら、よくやったと言われるわけ。

宮城：与論にはウマはいましたか？

竹下：ウマはほとんどいなかった。荷車を引く人やお医者さんのところにいたぐらいかな。

盛口：屋敷林はどんな木が使われていましたか？

盛窪：ガジュマル、シダラギ（ヤブニッケイ）、ユーナ（オオハマボウ）ですね。

竹内：ガジュマルが一番多かったですね。

竹下：城あたりではフクギもあります。フクギの大木が植えられているところは旧家ですよ。

盛口：シュロはあったでしょうか？
盛窪：シュロは必需品でしたから。無くなったのはタイワンカブトのせいだと思います。ただ、トウジュロのほうは残っていますよ。
盛口：シュロはあちこちの島でなくなっています。一方、沖永良部では、二軒の家で、もう一度、シュロを育てることをしてみようと、本土からわざわざ種を取り寄せたりしているという事を聞きました。
盛窪：私もシュロを育てようと思ったんですが、島では種から育たないですね。とにかく一番高級な繊維がシュロです。次がアダナス（アダンの気根）。その次がゲットウで、それと藁。子供の頃、シュロの縄で凧揚げしていたら、怒られたことがあります。
竹下：シュロの皮を取って、それを前後で縛って袋状にして、その中にヤドカリのプグイ……頭を取ったお腹のとこです……をいっぱい入れて、それをさげて、魚釣りです。皮をちょっとひねって、前と後ろを縛って、ちょうど納豆のつとみたいな形にするわけです。
盛窪：エサ入れですよ。フブシといいました。あと、リュウキュウチクは魚の目を通すのに使いました。
盛口：イザリの松明は何を使いましたか？
竹下：サトウキビの絞った粕を束ねたものです。
竹内：サトウキビの絞った粕は薪にも最高。

盛窪：松脂はなかったの？
竹下：僕らのとこにはマツはなかったなあ。
竹内：サトウキビの搾りかすが普通だった。
盛窪：僕の時代は石油ランプでした。世代で違いますよね。僕のころはもう、ほとんど芋も食べなかったし。
竹内：僕らは弁当も芋です。うちは公務員ということもありましたが。家で米を作っている人は、弁当がご飯だったりするけど。
盛口：子供のおやつになった木の実について教えてください。アダンの実は食べましたか？
竹内：アダンは食べれるという程度。
盛窪：アダンは食糧にはならないなあ。
竹下：アダンの実の中の芯のところは甘味がないけれど、切って料理しました。アダンの実は、今でもお盆に備えますよ。一説では、ご先祖様が御馳走を持って帰ろうとすると、悪霊が盗ろうとする。それを、アダンの実の外側のものを一粒ずつちぎってなげて退治する……と。古事記にでてくる話と似た話です。
盛口：ではクワの実とかは？
竹内：クワは最高。昔はミカンもたくさん植えてあったから、ミカンも。
盛窪：野イチゴ、最高。

竹下：アシクタ（クロイゲ）は食べました。
竹内：ガジュマルよりも葉っぱが大きい、シチャパガ（ハマイヌビワ）の実もおいしいです。ガジュマルは食べたことないですね。グミは与論にあるのかな。（注5）
盛窪：ヤマブドウ（エビヅル）は、ちょっと食べた。
竹内：あれは最高よ。
盛窪：シニグでつるを体に巻きつけるけど、それに使うのはヤマブドウといいます。こっちでは、山菜を食べることはないですね。アザミもツワブキも食べない。
竹下：バンジロウ（グワバ）は、僕は今でもおいしいと思う。特に与論に昔からあったものがおいしい。でも、今の子供たちは食べないね。種があるもんとかいって。
竹内：バンジロウはよそからきたのはおいしくなくて、もともとあったのがおいしい。
竹下：ミカンも山ミカンといって、昔からあるのがおいしい。今の子供は見向きもしないけど。バンジロウは、実に爪をあてて、爪の痕が残ったら、もう食べよったね。
盛窪：あぜ道にたくさんあったし。
竹下：僕は今でも家でバンジロウを大事に育てているよ。
盛窪：バンジロウには、ミジ（水）とイシ（石）とがあって、熟したらイシのほうがおいしい。あと、バンジロウの実は、熟し方で呼び名が変わります。爪立てても痕が残らないような硬いものはカッパチ、ちょっとうれかかったら、サーノー、熟して落ちるのもでたら、アンクルイと呼びます。

通学路の途中で、まだ熟していないのを見つけたら、枝を折り曲げて隠したり。

竹内：サーノーを採ってきて、うれるまでかくしておいて食べたり。

盛口：ミジとイシの違いは何でしょう？

盛窪：ミジは木全体が柔らかい感じがするけど。イシはかたいかんじだけど、熟すとおいしい。

盛口：イシクラゲという土の上に生えるノリみたいなものを食べましたか？

盛窪：昔食べたそうです。僕は食べたことがないけど。(注6) じいちゃんたちから聞いた話で、食糧がないときには、これとか、クサギとかも食べられると。

盛口：クサギは普段は食べませんか？

盛窪：食べません。

竹下：奄美大島ではツワブキは貴重というけど、こっちでは食べないですね。

宮城：奥ではツワブキは山羊の餌。

盛窪：与論ではタケノコも食べていないし。海のものは何でも食べるけど。

盛口：海藻もいろいろですか？

盛窪：モズク、スーナ（キリンサイ）。それとシピダという海ブドウ。これは海で採ったとき、そのまま海で食べないと。

竹下：ビルも酢味噌和えにして食べたよ。

盛窪：モーイも食べたね。

竹下：与論では土地にも等級があって、一～三等までつけられます。海に近いほど等級が下がるんです。潮風にあたると作物ができないから。海に近いところが一番低い等級で、そこから内陸にいくとウローと呼ばれる丘の連なりがあって[注7]、その内側は一級、等級があがります。その次にまた丘があって、その内側が一番等級が高い。ウローは昔のリーフです。ウローの内側の平たん地は昔のイノーですね。

盛口：前に与論は森がないので、木の上にすむ妖怪がいないという話を聞きましたが。

竹下：海にイシャトゥという妖怪がいます。片足でちょんちょん歩く。ただ、ウシク（アコウ）の根っこの中にでんでんむしの殻があると、これはイシャトゥの食べた後といってました。夜のイザリにいくときはイシャトゥがついてくるといいました。うちの母なんかもいっていましたね[注8]。

盛窪：木の精もいて、芋ガラをもやして、住処をもやしたと勘違いさせて、与論から追い出したなんていう話もありますよ。

竹内：昔の住宅はやんばるの材木を使っています。昭和になってからは杉材ですが、その前はシイなんです。

盛窪：昔の材は硬くて釘が曲がるほど。

竹下：それも全部、釘を使わないで組み立てていて。

竹内：うちの親父が建てた家は昭和の初めで、主な柱は杉だけど、そのほかの材料は沖縄で買ってきたらしい。

盛口：囲炉裏はありましたか？
竹下：見たことがありません。
盛窪：ただし、ジュヌメーといって、お産したときに体を温めるところはありました。（注9）
竹下：泥と藁で塗り固めてありましたね。
盛口：与論ではキジの鳴き声をよく聞くように思いますが、キジはなんのために持ってこられたのですか？
竹下：サトウキビの害虫としてバッタがよくつくので、それの天敵としてキジを入れました。そうしたら今度はキジが害鳥になってしまって。今では島外からハンターを雇って捕っていますが、それでも捕りきれない。野菜も食べ荒らすし、サツマイモでさえ、あるところを探して食べます。外来種をいれるのは慎重でないと。アメリカハマグルマというやっかいな草もあって、畑に入られたら、一面にそれだらけになってしまい、退治できなくなります。生態系を壊すというのは、非常に危険なことですね。
盛口：いろいろなお話をありがとうございます。

注1　実際に海岸で実物を見せていただいたところ、トウダイグサ科のイワタイゲキであった。これまでイワタイゲキの魚毒利用については、文献、聞き書き共に使用例を見たことがない。なお、琉球列島において、多くの島で魚毒として使われるのは、ルリハコベとイジュである。

注2　『辺戸岬から与論島が見える（改訂版）』（竹内浩、平成二一年）には、一六八二年、「徳之島代官堀甚左衛門与論島にて死去。ミーラ岳に葬り愛好の蘇鉄とともに移植する」とある。

注3　『与論方言辞典』（菊千代・高橋俊三、武蔵野書院、二〇〇五）にはシチチヌパー（ソテツの葉）の項目の解説に次のようにある。「生のソテツ葉は土中や水田に入れて肥料とした。また枯れた葉は焚きものとした。燃やしやすく重宝され、正月や出産などが近付くと刈り集め、大きな束にして家の軒下や小屋などに立てておいた。燃やしたあとの灰はバショウを煮るときに利用する」

注4　『与論方言辞典』によると、薪のことはタムヌとよぶが、木の枝などの薪はシダムヌ、枯葉などの薪をパーダムヌと呼ぶとある。ほかに、薪と関連した用語として、マチギダムヌ（松の薪）、フギガラダムヌ（キビがらの薪）、アダンパダムヌ（アダンの葉の薪）といった用語も記載されている。

注5　『与論町誌』（与論町教育委員会、昭和六三年）には、子どもたちが食べた木の実として、バンシルー、クワーギ（クワ）、イチュビ（ホウロクイチゴ）、シチャパガ（ナガハアコウ）、アーマンギ（フクマンギ）、アシクタ（クロイゲ）、シャーギ（イヌマキ）の名を挙げている。また「このほか、アダニの実の中身にくっついている多数の楔形のものを「チー」（乳の意）と呼び、熟すと甘味があったので吸った。またサンニン（サネン）の花の蜜を吸った」と書かれている。同書にはアダンの実に関して、「アダンの実をイヤーフジ（お盆）に備える習俗があったが明

治中期頃から絶えたという。飢饉の年は煮食した」と言う記述もある。なお『与論方言辞典』には、アダンの実のことをアダニママと呼ぶことと、アダニママショーシという料理（実をゆでて酢であえたもの）のことが書かれている。

注6　『与論方言辞典』にはヤマオーサと呼ぶとある。

注7　『与論方言辞典』のウローの項目の解説は以下のようにある。「丘陵の名。大字麦屋の石積半田より大字故郷の赤平を経て北方に続き、故郷、那間より西方に曲がって大字茶花の北端、品覇に達する。ウロー山脈とも呼ばれている」

注8　『与論方言辞典』のイシャトゥの項目の解説は以下のようである。「アコウ樹などの大木に宿るものと、岩に宿るものがいる。夜になると海にでる。遠くから火の塊のように見える。体は小さい子供の形でクバ笠風の笠をかぶり、一本足である。海では人間の漁の邪魔をする」また、同書のイダイダムヌ（いざりの薪）の項目の解説には「ひとより先にいざり漁に出るとハタパギ（一本足オバケ）がいざり火をもらって魚介類が捕れないので、海岸でイダイダムヌに火をつけたら、ハタパキ用に残り火をその場に残しておくものといわれていた」とある。

注9　『与論町誌』には「ジュー（ジュヌメー）は家の機能の一つとして必ず造られたものである。火気を使用できるように三尺角を粘土で塗り固めたいろり型で、産後の一週間この中でガジマルの生木丸太をもやし、母子がぬくもる場所であった。夏のお産でも、火を小さくしてジューを離れてはいけないとされた」とある。

菊千代さん（昭和元年生まれ・与論民俗村）

宮城：与論とやんばるのつながりについて、いろいろと教えてほしいと思っています。

菊：漁具も垂木もみんな沖縄から来ましたから。

盛口：染色に使う藍も、昔は沖縄から運ばれたのでしょうか？

菊：藍も戦前は、沖縄からきました。子どもの頃、正月前に買い物に行くと、沖縄のおばさんが、バーキに藍玉を握ったものを入れて、軒下で膝を立てて座って売っていたのが、まだまぶたに浮かびます。戦後は自分達でも藍をたてていましたが、戦後は、沖縄からソテツの実やサツマイモを与論に買い出しに来ていました。だから、サツマイモをかますにいれて用意していて。そのころは、物々交換です。穀物を干すのに、ニンブーとかを使っていましたから、沖縄から、アメリカのテントみたいな布をもってくると、母が喜んで。

盛口：ソテツの実がほかのものと物々交換される価値があったのですね。

菊：ソテツの実は宝。構造改善の後も、息子はソテツが大事だと、わざわざソテツを植えました。ソテツの実があったおかげで食にも困らなかったし、物々交換にも困らなかったです。（注1）

宮城：戦前、アダン葉でパナマ帽を作ることがはやって、奥では原料のアダンが不足して与論から

輸入したという話がありますが、ご存知ですか？

菊：母の実家は村宿でしたが、そこに、そこらあたりの人が集まって、アダンの葉で帽子を作っていました。戦後まで、帽子の型がありましたよ。それとアダンの葉をたばって、沖縄に送ったそうです。アダンバ帽子、復元してみたいですね。アダンバは二日間ぐらいか、大鍋に糠と一緒にいれて炊くんですよ。真ん中の骨と両側の棘を取って。アダンバを束にして、糠をいれて煮込む。そうしたら、取り出して、ガラスの上において、ガラスのかけらで葉をしごいて。一度、棘なしアダンでやってみたことありますが、これはダメでした。やっぱり本来のアダンでないと。これ、島おこしで、やってみようかね。戦前までは、親孝行は那覇見物といって、那覇に買い物に連れて行って、芝居を見せるのが、最高の親孝行と言っていました。そんなふうに沖縄との交流がありました。

盛口：与論でも、ソテツの実をたべていたわけですね。

菊：実を食べるのは、ぜいたくだったといいます。明治二六、七年の飢饉のときは、実が無くて、幹を食べていたそうです。出征兵士を送りに行ったときに、幹を食べる様子を一度だけ見たことがあるけれど、黒い皮を落とすと、中に肉があって、その中に軸があります。その幹の中身をヘラぐらいに薄く切って、山のところに干してありました。中の軸のところが一番おいしいそうだけど、もちろん、物のないときに食べたらおいしいといってたもので、おいしくなんかないんですが。草原で乾燥させて、乾燥したらカマスに入れて発酵させて、それを水の中に浸

けてあくぬきをして、砕いて食べるといいよったな。実を採るにも、昔の人は雌花と雄花を交配させることがわからなかったそうですけど、明治二五年ごろに交配させるといいというのが伝わって、交配するようになりました。どんな飢饉があっても、ソテツがあるうちは死なないと思っています。去年はソテツで味噌作りをしました。米二キロ、ソテツ二キロ、大豆二キロで、麹をたてて味噌を作って。

盛口：アダンの実のことも教えてください。与論方言辞典を拝見したら、アダンの実をばらばらにしたものをチーと呼ぶと書かれていました。お乳のように吸うからチーというと。アダンの実は、子どもたちのおやつだったのですか？

菊：与論方言辞典を書くのに一七年かかりました。アダニヌチーは、子どもだけでなく、大人もごちそう。実の中の軸も食べました。小学生のころ、薪拾い、草刈は、このあたりではどうしても海の方へ行きます。だから行きついたところは浜です。そこにアダンの実があって、食べて。学校の帰りも、どこのアダンの実はおいしいという話をしながら帰りました。こっちがおいしい、むこうのはおいしくないとわかっていました。アダンの実の中の軸が一番おいしい。食糧難のときは最高のものです。生で食べるだけでなく、あれを輪切りにして、ゆがくか蒸して食べました。調味料は、あの当時は味噌だけで味付け。マメとかも一緒に煮込んで食べたものですよ。魚とかも入れて。子どものころに食べたものです。アダンの実の軸は外側がおいしいんです。

盛口：与論方言辞典には、雨降りのときは、アダンの葉の薪を採りに行ったという話がでてきます

ね。

菊：薪採りも、いきつくところは浜のアダンです。枯葉を採って、実を採って、アダンはいつの世でも宝です。(注2)

宮城：アダンのチーの中を割って、食べましたか？

菊：食べました。あれはおいしかったね。食べるところはコメ粒ぐらいしかないけれど。

盛口：畑のわきの土の上に生えるヤマオーサを食べましたか？

菊：あれは食べられます。私の祖母は豚の餌にすると言って。でも、友人が、豚の脂で炒めたらおいしいよと言うんです。ばあちゃんは豚の餌だよーと言うんですが、あんまり私がせがむもんだから豚の脂で炒めてくれて。ただ、あれは消化しないので、食べた後吐いてしまいました。見るたびに、なつかしい思いがします。そうして、興味しんしんで、何でも食べて、九〇歳まで生き延びました。戦後はいろいろ食べました。アコウの若芽とかアダンの新芽とか、クサギも。ただ、私たちは芋の葉が最高だと思いますが。どの草が食べられる、どの草は中毒するとわかるから、私たちは生き延びる力がある。飢え死には絶対しません。

盛口：キクラゲとかマツナバとか野生のキノコを食べましたか？

菊：このあたりはマツがありません。キクラゲも私は食べなかったです。私たちがよく食べたのは、野菜と魚です。

盛口：アイゴの子どもを、与論ではイューガマと呼ぶそうですが、イューガマも捕りましたか？(注3)

盛窪：イューガマは時期になると見張りがいて、来たときは競争で捕ります。
菊：なつかしいね。そういう時代もあるね。イューガマはしばらくするとクサバン（草色に変色して食べられない）になって。
盛窪：もう海に藻場がないからイューガマも寄りません。もう、貴重品です。
盛口：このあたりには田んぼはありましたか？
菊：ここらは田んぼはなくて、芋と麦と豆を作っていました。
盛口：塩炊きはしましたか？
菊：あれでもうけました。潮水は海岸の平たい岩場の水たまりに水を撒いて干して。いつも干す場所はヤスモトグルシと、父の名前がついています。潮水を撒いて、乾いたらまた撒いて。夕方、水たまりに残った潮水を雑巾にすわせて、それを搾って桶にいれて。そうすると、潮水が濃くなっているから、芋も浮きよったよ。濃くなると焚き物が省略できたから。それを持って帰って炊いて、塩にします。ただ、あれはすぐに炊くと、石の上の潮水をふいてしぼったわけだから、のりとか岩のくずとかいろいろまじっているから、塩が白くならない。それで、塩を炊く鍋の中に、どんぶりを紐でかがって吊るしておくと、汚物はみんなこれに入ってしまって、塩は真白くなります。終戦後は沖縄から塩売りが来ましたね。
盛口：草を使って魚を捕る話を教えてください。
菊：ミジングサとパッタイマチはウマヌパナというハゼを捕るものでした。潮が引いたら、となり

のばあちゃんがよく行って捕っていました。リーフの一番上の潮だまりで、草を青くすって入れて。今はあのハゼもいないんじゃないかね。昔は電灯もなかったから、夜、潮が引くと、子どもたちが手さぐりで海に行きました。そうすると、岩の上で寝ていたんだろーね、ウマヌパナが飛び跳ねて逃げていきます。人の足音が聞こえるんだろうね。海に入るまでに、もう、ぱちゃぱちゃと音をして逃げていく……。その光景がまだ目に浮かびます。海のいろんな海藻も貝もいなくなってしまって、海が貧乏になってしまいました。昔、小学生や中学生を海に連れて行ってくれるおじいさんがいて、網を張って魚を捕りました。緑色の小魚を網に追い込んでね。一人があかくみ一杯分の魚をもらえるときもあるし、一杯分をふたりでわけるときもあるし。そのおじいさんを頼りに子どもたちが集まって魚を捕りに行きました。それが思い出深いです。捕った魚は塩漬けにして、食べる時は塩抜きして、芋をふかすときに一緒に食べて。おいしかったです。夜、寝床に行くと、そうしたことばかりがまぶたに浮かんで、なかなか寝付けません。だから、友達にも、海岸線だけはつぶさすなよーと言っています。

盛口：いろいろなお話、どうもありがとうございます。

注1　『与論方言辞典』にはソテツに関連した項目が以下のように多数あげられている。

シチチ　ソテツ

シチチガイ　ソテツの粥

シチチギャーラ　ソテツの幹を適当に切ったもの
シチチニギ　ソテツの棘
シチチヌナイ　ソテツの実
シチチヌナイドゥーシー　ソテツ粉を主体としてつくる雑炊
シチチヌナイドゥンガ　ソテツの実の粉で作った団子
シチチヌナイミジュ　ソテツ味噌
シチチヌナイムッチャー　ソテツ粉の蒸し菓子
シチチヌパー　ソテツの葉
シチチバーマ　ソテツの葉や棘の間にある茶色の綿状のもの
シチチブクル　ソテツの頭の実がたくさんついているところ
シチチマイ　ソテツのご飯
シチチヤマ　ソテツ山
シチチユダ　ソテツの葉を切ったあとに残った枝

注2　『与論方言辞典』でアダンに関連した項目が以下のように多数あげられている。
アダナシ　アダンの気根
アダナシジナ　アダン縄
アダナシビマイ　アダンの気根の繊維でなった小縄

アダニ　アダン
アダニヌチー　アダンの分果
アダニシブルー　アダンの群生地　アダン山より面積が狭い
アダニナーグ　アダンの若葉・葉の芯
アダニブッカ　枯れ腐って、ぶかぶかになったアダンの幹
アダニママ　アダンの実
アダニママショーシ　アダンの実で作った酢の物
アダニ山　アダン山

注3　『与論方言辞典』でイューガマに関連した項目が以下のように多数あげられている。

イューガマ　アイゴの幼魚
イューガマガラシュ　アイゴの幼魚の塩辛
イューガマグリ　イューガマが寄るころに小雨が部分的に降る事
イューガマシキンチュ　イューガマをすくって捕る人
イューガマブニ　イューガマを捕るのに使う船
イューガマヤブリ　イューガマが海岸に寄る頃、天気が悪くなること
イューガマユラリ　イューガマが寄る頃、海へ通い続けること
イューガマヌ　クサバユン　アイゴ稚魚が海草を食べて色が草色になりかける

川内陽吉さん（昭和三年生まれ）

盛口：川内さんのお宅の柱は随分と古いように見えますが。

川内：昭和二三年に建てたものです。柱は大島のシイの材です。表面は虫にくわれても、中の芯はいつまでたっても、虫にはくわれないよ。

盛口：沖縄との交流もありましたか？

川内：私のおじいさんらは、お酒をたいて、奥までお酒を売りに行きました。そのお金で豚をかってきて。終戦前。私の子どものころの話です。

盛口：それは芋で作ったお酒ですか？

川内：米でお酒を造っていました。

盛口：このあたりも田んぼは多かったのですか？

川内：田んぼは多かったです。

盛口：ソテツを緑肥にしていましたか？

川内：ソテツを緑肥にしたのは、戦後の話です。戦前は田んぼに何も入れるものが無かったから。でも、その頃は雨が多かったので、三、四年、田んぼに水がたまっていて、土が腐って、何も入

れんでも米がよくできよったです。田んぼにはドジョウやフナも泳いでいて。

盛口：ソテツの葉を緑肥にしたのは戦後のことなんですね。

川内：大変でしたよ。ソテツの葉は切って畑に埋めると、キビがよくできよったですよ。あと、キビの肥料には、海からウニを採ってきて入れると、砂糖が炊きやすくなります。

竹下：その頃は海にはウニがたくさんいたから。

川内：足の踏み場もないくらい。肥やしにしたのは、ウンバームイという小さいウニです。食べるのはハチチというウニです。ウンバームイも味噌汁にしても食べよったですが。

盛口：製糖工場ができる前は、サーター小屋での製糖だったのですね。サーター車を回すのは、牛でしたか？

川内：そうです。

盛口：砂糖を炊くときの薪は何を使ったのですか？

川内：藪からカヤとか雑木とかを切って、枯らして使いました。あとキビがらも干して使って。昔は牛で絞っていたから、完全には絞れないので、干すと、いい焚き物だったですよ。

宮城：ひくのは石うすですか？

川内：そうです。イシシと呼んでいました。

盛口：昔は普通だったのに、無くなってしまったものとして、シュロがありませんでしたか？

川内：シュロはもったいないと思います。種があったら、作りたいです。シュロは高く伸びるので

風で倒されたり、邪魔だという事で伐採されたり。それにビニールロープができたら必要なくなったということで、いつのまにか見えなくなってしまいました。

盛口：魚を捕るのに、草をつぶして魚を酔わせて捕るということをやりましたか？

川内：ミジングサとかパッタイマチとか。

竹下：ミジングサ？　私なんかのとこではミミジグサと言うが。

川内：その頃はリーフにいけば、たまりに草をもんでいれると魚がでてきて、捕れました。

竹下：青酸カリは？

川内：鹿児島まで行って買って、使いました。

宮城：与論には鍛冶屋がなかったんですか？

川内：いっぱいありましたよ。

宮城：以前は、鍛冶屋で青酸カリを使っていたので、鍛冶屋で買いましたよ。

川内：そういうふうに自由に買って使えたけど、これを漁に使うようになって、結局禁止されてしまいました。

盛口：ドジョウは食べましたか？

川内：フナは食べましたけど、ドジョウを食べるというのはあんまりなかったですね。泥臭いから。

竹下：ドジョウを腫れ薬にしなかった？　二つに割って、腫れたところに生のまま貼って。

川内：やりました。昔はよくニブトといって、腫れものができたから。

宮城：奥ではオオバコを火であぶったもので、膿の吸出しをしましたが。

川内：与論でもそれはやります。ただ、ドジョウのほうが効果があって、ドジョウのほうが、早めに膿がでよったですよ。

盛口：ソテツは食べましたか？

川内：私は子どものときによく食べました。戦後も食べました。

盛口：食べたのは実ですか、幹ですか？

川内：実……ナリの方は、味噌も作れるし、餅も作れます。幹のほうはそういうのには使えません。ダイコンみたいに炊いておかずとして食べたのは幹のほうです。それを製造する過程が難しいわけです。幹の芯が長くあるので、それを輪切りにして、からからに干して、水分に浸けて毒を抜きます。それを取り上げて、藁やムシロで包んで保管するとカビが生えてきて、食べられるようになります。食べる時は洗って、炊いて。昔は豚の脂があったから、脂、砂糖と入れるといいおかずです。これはスチチジャーといいます。

竹下：幹を短冊のように薄く切ったものを奥ではキャーラというそうですが、与論ではギャーラといいます。

盛口：もともと「けら」が語源で、「キャーラ」や「ギャーラ」に変化したのでしょうね。

川内：けらと言えば、スギの板を薄めに割って、屋根を葺くことがありました。軒下とか、神社の屋根とか。このけらがどこから持ってこられたのを知りませんが。

盛口：アダンの実を食べましたか？
川内：食用に食べることはありませんが、採ってかじれば味があるから、よく子どもが採って食べました。
盛口：バラバラになったものはチーと呼ぶんですよね。
川内：そう、アダニヌチー。
盛口：アダナシ（アダンの気根）も使いましたか？
川内：アダナシは大事な繊維です。牛の紐もアダナシです。シュロはなかなかないから。アダンは浜辺に行くとたくさんありますから。ほんと、こうした話は、私たちが死んでしまうとわからなくなるはず。私の同級生も、もう六名しかいません。
盛口：このあたりはマツ林はありましたか？
川内：ピャーヌバンタのほうにはあったけど、このあたりにはマツ林はありません。
盛口：マツ林があるところでは、マツ林に生えるキノコを食べたりすることもあったのではと思ったのですが。マツがなかったとすると、食べるキノコはキクラゲぐらいでしょうか。
川内：キクラゲはミングイといいます。ウスクとかガジュマルとか、シチャパガとかの柔らかい木に生えます。
盛口：ヤマオーサーは食べましたか？
川内：脂で炒めればおいしかったです。歯ごたえがあって。今でも採って食べたいなあ。いつか食

べてみたいですね。

盛口：与論でサーラキという、サルカケミカンは実を食べたりはしましたか？

川内：サーラキは、ヤギの大好物です。幹は丸く曲げることができるので、子どものゆりかごの枠は、これで作りました。ただ、サーラキの実を食べたことはないですね。

竹下：口を滑らすと、すぐにほっぺたを膨らませたり、いかったりするような人のことを、「あいつはサーラキだ」と言ったりします。サーラキは棘があるでしょう。それと同じで、棘のある人間だから、さわらないほうがいいと。

川内：シチャパガは赤く熟れたものは、実が食べられます。葉はヤギが食べます。ただ、枝を折るとでてくる液が口をさすから、牛はあんまり好みません。

盛口：ヤギはそれに対して、サーラキもシチャパガも、くせのあるような木の葉でも食べますね。

川内：ヤギは何でも食べるから薬になるといいます。クワズイモだけは食べませんが。

盛口：クワズイモの葉を、ビニールの無かった時代は、甕の蓋にしたという話をほかの島で聞いたことがありますが。

川内：そうです。あぶってから、甕の口をふさぐにはいいです。

盛口：与論ではカタツムリを食べましたか？

川内：食べません。ただ、アフリカマイマイは、しばらく食べていました。台湾では薬になるというらしいですね。与論ではヤンバルチンヤンと呼んでいました。炊いてから、海でもんでぬめ

りを取って、そのあと油で揚げててんぷらみたいにして食べました。そうすると海の貝みたいな味がしましたよ。

盛口：どうも、いろいろなお話ありがとうございます。

川内：また、話を聞きに来てください。

池田テツさん（昭和元年生まれ）

盛口：池田さんの家のある叶のあたりにも、田んぼはありましたか？

池田：ありました。私たちもタニシを取りましたし、ドジョウもよくいました。ドジョウも今はみなくなりました。

盛口：ドジョウは食べましたか？

池田：食べたことはありません。捕ってくると鶏が喜んで食べよったですが。あと、カエルがいっぱいおったですよ。カエルのことを与論ではアタビクと言います。

盛口：沖縄だとアタビーといったりします。

池田：やはり、よく似ていますね。

盛口：ソテツは食べましたか？

池田：ソテツを食べて育ちました。

盛口：それは実ですか、幹ですか？

池田：幹は食べたことがありません。実から味噌を作ったり、お粥にしたり。ドゥシーメー（雑炊）を作ったり。スチチムッチャーというおもちを作ったり。主には味噌でしたが。昔は、田んぼがあっても、自分たちの常食ではなくて、お盆とか行事の時だけ食べることができました。田んぼで作ったのは、最初、赤ひげ米、やんばる米といっていたものです。やんばる米は葉が大きいから、藁は屋根を作るときにはよかったんですが、実はあまりつけません。やんばる米をつくっていたときは、日常食は米ではありませんでした。そのあと私が小学校二年生のころに、奥羽一号という品種が入ってきて、これは背が低いのですが、たくさん実をつけるので、ようやくお米をよく食べることができるようになったんです。昭和一五年の戦争の頃、私は高校一年ですが、このころは弁当は芋ばっかりになりましたが。

盛口：田んぼの肥料にソテツの葉を使いましたか？

池田：昔は肥料がないので、ソテツの下葉を小さく切って田んぼに入れて、足で踏み込みました。私も踏んだことがありますが、その日の夜はあちこち痛くて眠れませんでした。これは昭和二三、四年のころまで続きました。

盛口：昔は燃料も薪でしたね。

池田：ソテツの枯葉やらススキの枯れたものを採りに行きました。貴重だったですね。自分の畑周

りとかに採りにいくんですが、ハチにさされて、顔を腫らしたまま学校にいったり。木の枝はなかなか拾えません。枯葉を薪にすると、芋を煮る時もぱーっと火がついてすぐに消えてしまうので、子どもにはかまたきはできなかったですよ。

盛口：いまちょうど、ソテツの雄花が咲き始めていますね。

池田：雄の花を採って、雌の花に入れよったですよ。そうすると、中の実がぎっしりつまるんです。父や母やソテツの花がでたころ、入れにいきよったです。

盛口：ソテツはどこに生えていましたか？

池田：道端とか。道のそばに植えてあったです。ソテツ畑とか、一か所にまとめて植えてあったのはなかったです。ススキやアダンも道端にありました。

盛口：アダンの実は食べましたか？

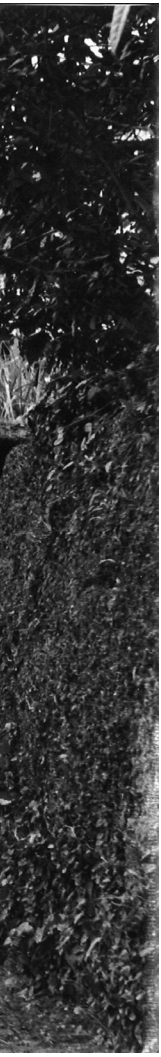
池田：食べたことがありますよ。アダンの実の外側はヤドカリが食べるものです。中の芯の部分を切って食べよったです。ヤドカリは養っておって、海に行く人は釣りにつかいました。アダンの実をちぎって、ツボにヤドカリと一緒に入れて。そのヤドカリで、親父たちが釣りに行きました。

盛口：子どもたちが食べた木の実には、どんなものがあったでしょうか。

池田：シチャパガ、クワ、イチゴ、ママンギ（フクマンギ）、それとバンシルー。

盛口：お産の時、ジューといういろりでガジュマルの薪を燃やして、体を温めるという事ですが。

池田：私もそんなしてやりました。
盛口：屋敷林もガジュマルだったのですか？
池田：そうです。ガジュマルは神様や命日とかにもささげるものです。ガジュマルとソテツが一番、いきが長い木ですね。
盛口：このあたりでは、海まで行くことはあまりありませんか？
池田：いきません。このあたりは高さも七〇メートルありますから。
盛口：昔は正月前に豚をつぶしたものでしょうか？
池田：そうそう。交代で。今年はあんたんとこでやるよとか、だれだれのとこでやるよと言って。必ず各家に牛一頭と豚一頭はいましたから。鶏はもちろんですが。牛は田んぼや畑を耕すためです。あと、ソテツ山まで、何十キロもソテツの実を採りにいくときは、牛の両側にオーダ（もっこ）を下げて採りにいきました。採ってきた実は押切で割って、干して。夜な夜な夕飯のあとは、実の中身を取り出す作業をして。これを一週間ぐらい大きな鍋の水に浸けて毒を抜いて。乾かしてから臼でついて。大変な仕事です。ひき臼でひいたものはお粥とかにしました。こんなふうに食べるまでには長い道をたどったですよ。ソテツの粉でお餅もつくりました。ソテツは命の親でした。いまは見向きもされなくなってしまいましたが。でも、ソテツを見ると昔を思い出すから、庭にはソテツが植えてあります。ソテツを切って捨てたくないんです。
盛口：どうもお話、ありがとうございました。



与論島麦屋の暮らし――佐藤為宜志さんのお話

安渓遊地・安渓貴子

与論島は、奄美が復帰した一九五四年から沖縄が復帰する一九七二年にまでは日本の最南端の国境の島でした。年に一度、沖縄島の北の端の辺戸岬とかがり火をたいて交信しあったという与論の人々と沖縄とのきずなを学びたいと思って、私たちが那覇から飛行機に乗って大島郡与論町を訪れたのは、一九八九年の四月はじめのことでした。小学一年生だった息子は泊めてもらった東区の民宿「星砂荘」の子どもたちと遊び、私たちは、宿のご主人に大盃で黒糖酒をふるまわれました。あいさつの言葉を述べ、必ず飲みほしてしずくを手に受け、その掌を頭に置きます。これが、与論献奉といわれる親しみをこめた儀式です。お酒をまじえて宿でいろいろなお話をうかがいました。まず、役場で紹介されて、郷土史家で『奄美文化の源流を慕って』（道の島社）の著作などがある野口才蔵先生の御教示を受けました。ちょうど『与論町誌』が出たところで、たいへんよい手引きになりました。また、たくさんの民具と方言を収集して『与論方言集』（与論民俗村発行）をまとめておられる菊千代さんにも味わいの深いお話をうかがいました。お話をうかがって三〇年以上の時が流れて、お店はもうありませんが「星砂荘」の向かいにあった、酒屋のおじいちゃんの佐藤

佐藤為宜志さん　ガジュマルの枝で家を祓うようす（著者撮影）

為宜志（ためぎし）さんに二日間にわたってうかがったお話をご紹介しましょう。

かぞえ年で九〇歳になられるおじいちゃんは、たいへんに話好きでいろいろと話してくださいました。方言のこと、子どものころのこと、青年時代の生活、沖縄とのかかわりというような順序で話をうかがううちに、家づくりのこと、そこに生まれる神様のことにも話題がおよびます。

佐藤為宜志さんは、お店の来客の応対をしながら、実に根気づよく熱心に話相手になってくださいました。その後ごぶさたを重ねているうちに、一九九三年の一二月二五日に九四歳でお亡くなりになりました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。下原稿を、為宜志さんの娘さんの才子さんに見ていただき、公開の了承をたまわりました。このたび、地元の喜山康三さんに見ていただいて、いくつかご教示をいただきましたので、方言の表記を少し直し、与論島全般にあてはまるとは言えないと考えられる事項については、（編注）として追記しておきました。とーとうがなし。

与論の言葉が懐かしい言葉になるよ

与論のことば面白いよ。ゆっくり習えば与論の言葉が懐かしい言葉になるよ。あなた方は、与論ことばも聞かせ、与論民謡も歌えとおっしゃるが、わたしのことをどこで聞いてこられましたか。

――向かいの民宿で紹介されたんですが、わたし（遊地）のじいさんが大島の瀬戸内町の西阿室の生まれなもんですから、奄美の島々のこともいろいろ勉強したく思いまして。

ああ、そうですか。あなたさまのねえ。私は、名瀬あたりはあまり行ったことはないんですよ。ここの方言で、「ウレーターヤ　イダカラ　ウヮーチャンガ」といいますが、どういう意味かわかりますか。

――あてずっぽうですが、「あなた方は、どこからいらっしゃったか?」ですか。

ああ、よくわかるね。はい、というのはオー、うやまって言う時はウレー。与論島は、もとの六か字が後に現在の九か部落になっています。各字ごとに少しですが、方言が違いますよ。与論ことばはやさしい言葉よ。鹿児島の頴娃（えい）の言葉は、わかりにくいですねえ。スズメのさえずりのようにチリチリして聞こえます。反対に種子島の言葉は、ゆっくりして懐かしい感じがします。わかりやすいのです。

子ども時代のこと

――今日は、まずおじいちゃんの子ども時代から青年時代ぐらいのお話をうかがいたいんですが。

わたしは、明治三三年の旧六月七日に生まれましたが、弟と同時に届け出されて、戸籍には二つ年下についていたので、二〇年後にようやく年齢を訂正しました。女四名、男五名のきょうだい九名のうち、私は五番目で、三男です。名前は親がつけました。

一三名の家族で、家の広さは三間と三間の九坪の母屋と七坪の家がありました（編注、この当時、三間角の家は、例外的に大きな家でした）。どちらもガヤ葺きですよ。そこに私なんか男の子は表の方の、じいさんが休んでいる所に並んで寝ました。

主食は、さつまいもと麦と米でしたが、子どものころの楽しみといったら、一〇日から二〇日に一回ぐらいソーメンを大鍋に炊いて、家族一三名が集って一生懸命食べることでした。昔は、ソーメンが御馳走でしたが、今わたしなんかあんまり食べたいと思いませんね。正月一五日にはムムニーナといって、芋を練って、粟なんか入れて食べました。子供にはこれを食べんとマヤーンチク――これは鍾乳洞にいるコウモリですが――になるよと威したものです（編注、コウモリでなく、フクロウのことかもしれません）。

海の水を汲んできてそれで味をつけておつゆを炊いていました。お茶は自分でつくる人もよそから買う人もいました。昔は力まかせに木をこすり合せて火を起こしたと聞いています。あとは火打ち石でタバコを吸いました。わたしのころはもうマッチでした。枯れたアダン、ソテツ、木などを集めて、家の一画に溜めておいたものです。

子どものころのもうひとつの楽しみはムヌヌパナシ、つまり幽霊の話と修身のえらい人の話でした。

父親は元治元（一八六五）年の生まれです。うちは父の代から佐藤という姓をなのっています。明治八年に戸籍法が改正されて、その時初めて上の名前（苗字）として佐藤がついたんです。佐藤がいいか「保（たもち）」がいいかと選ばしたんだそうです。「保」は一つの字だから、二文字の佐藤がいいといって佐藤になったそうです。その時には色々な名前があったそうです。竹の生えたところでは竹下とか、山のところでは山下とか。本人から「こうしてください」と言わん人はそんな風に地名のようにつけられました。自分でいうた人は富岡とか内田とかいろいろあります。

石板と石筆

この辺ではわたしのお父さんひとり学校に出ました。城（グスク）集落のえらいサムレー（侍）

の家に二、三か所学校があったんです。その学校では一〇時から一一時ごろまでは牛の草刈り、あと一一時から一二時に読み方、書き方、ソロバンをやったそうです。

ここは昔は山道でねえ、ガヤ（茅）やソテツに荷物があっちこっちひっかかるような曲がりくねった道でした。荷物をウチクイという風呂敷に包んで通いました。わたしらは、小学校一、二年まではイシセキバン（石板）とイシセキヒツ（石筆）を使いましたよ。与論尋常小学校六年を卒業しました。そして、学校を卒業したら親の手伝いをしました。かぞえで二一歳の徴兵検査を徳之島で受けました。あの時は、マーランという帆船が迎えに来ました。

わたしの同年配には普通語（共通語）がわからん人が多いんです。七〇から上の人には普通語を知らんじいさんばあさんがいます。あの時は義務教育といっても自由じゃったよ。学校歩かないで（学校へ行かないで）無学の人もあったわけです。

代々の農家

うちは代々農家で、わたしで一三代目の子孫。西区と朝戸の間の麦屋にずっといたんです。それからキヌ、いまは高尾（タホー）と言っている所、そこに行って、そこから今の本家にうつって、わたしはそこで生まれました。財産（土地）も一町歩（一ヘクタール）ほどありました。田があち

こちに四反歩ほど点在していました。残りはパッタイ（畑）です。うちのように一町歩も財産があるのは、島では面積の多い方で、他の家では二、三反歩（二、三〇アール）がせいぜい。一反歩という貧しい家もありました。そういう貧しい家では、米を炊くのは盆と正月ぐらいのほんとうに限られた日でしたね。

田んぼは、本家には俵で一〇俵ほど穫れる田がありました。収穫の時季には鼠の番をして田のそばで寝ていました。上納蔵（編注、高倉のこと）が三つありましたから稲の束はその蔵にあげておいたんです。税を納める時には蔵から降ろして臼ですって一升、二升と米にしてね。

畑の広さは「何合蒔き」と数えました。蒔く種の量で言うんですね。麦の場合、一斗蒔きが一反歩と決っていました。昔は五勺から一升まで桝がありました。田の広さは尺などの長さなんかでは測らなかったです。

男には皆に平等に土地を分けてやります（編注、喜山さんによれば長男のみが相続）。女にも芭蕉布を織るためのバシャヤマ（芭蕉を切る畑）として少しずつ分けます。わたしの娘は鹿児島に嫁にいきましたが、島の外に出る娘にはバシャヤマを持たせられないから、代りにお金の五〇万円くらい持たせました。それからフトゥムチといって夫を持ったら、たんす、ふとんの一組などを持たせました。嫁にいく時に持たしてあげるという意味です。

豚と田うなぎ

家には、ウシが一頭と、ブタが一頭いました。どちらもメスで、仔を産ましていました。わたしが青年から壮年の時代まではブタを二株か三株かで共同でつぶしていました。トゥシヌユル（おおみそか）には豚の吸い物をつくって食べました。ソーメンと豚肉を供えるのが島の習慣です。

田にタナギ、田うなぎがいました。焼いて食べました。年中水がある所に小さい魚が集っていました。海の魚ウンヌイユーに対して、田の魚はターヌイユーといいます。

海が好きで

農家は朝五時から五時半までに起きて六時までには御飯を食べます。食べたらすぐ畑仕事をしながら潮のひくのを待ちます。たとえば一〇時に潮がひいたらすぐ浜へ網と水中眼鏡を持って行きます。友達も潮の引く時間、満ちる時間を知っているから、いっせいに浜に集ります。

小学六年を卒業したあと、わたしは海が好きでよく行きましたよ。友達、兄さんたち、また二〇、三〇歳も年上のおじさんたちがよくわたしをかわいがってくれました。自分のことですが、わたしが正直であったので、かわいがられたんです。海のあちこちに連れて行かれました。沖永良

部島のクンゲーダキという和泊の北の方にも八日くらい、五名、六名でいっしょに魚捕りに行きました。小屋を借りてただで寝泊まりしました。そこのじいさんが「おい、君はわたしの所にきて眠りなさい」というので、じいさんの家へ行って眠ったんですが夜中に寝ごとを言うて笑われたことがありました。

追いこみ漁に五名、六名と連れ立って行きました。たて網を入れてバタンバタンと泳いで魚を追いこんでとるのが好きでした。毎日魚を捕ってきておかずにしていました。

おいこみをする時季は夏、八月ごろですね。暑いころが潮がいいので魚もよく捕れるんです。旧暦で一三日から一八日まではリーフが三時間ぐらい前浜から茶花の沖まで真っ赤に出る。この百合ケ浜でも刳り舟が二隻ぐらい出入りする溝を残して、大型の車が二台並んで通れるくらい出ます。この時は、おおかた潮が引いて浅くなる時に行って追いこみをします。昔の人は時計がなくても、太陽さえ見えれば時間がわかったんです。それから、海の潮を足で踏んで、「今日の潮は旧の何日の潮だから」と考えて、潮の深さで時間がわかりよったです。

青年たちは自分で網をつくってやっていましました。木綿の糸で、大きい、高い網を作りよった。糸は直径二ミリぐらい、指三本の目で編んでそれに、自分で錘をつけ、薄い木の板に穴をあけて浮きをつけました。そしてその下にはひもをつけてひっぱり、石をつけて下げて網を立てるように工夫しました。そして海の中で、魚を追いかけてきてかかったら潜って行って、その網を二回巻いてそして起き上がって、呼吸をかえて、魚を網といっしょに舟で引き上げます。それをまたおろして

りっぱに直して、むこうがたも舟にのせてくるんです。りっぱな魚の道があるからそこを三名ずつでだんだん追ってきます。潜るのが上手なひとが二人ならんでいるから、魚がきたらさっと潜って捕ります。昔は潜り方もちがいました。昔はウンハガン（水中眼鏡）をかけて息を吸って大きく潜り、あがってきてふーっふーっして息をついた。眼鏡は水ももらないものですよ。

毎夏沖縄へ

――沖縄へ行かれたことは？

はい。初めて行ったのは、亡くなられた昭和天皇様が皇太子の時代にイギリスに行かれた年（一九二一年）の夏です。ここから見えるアダバナレという離れ小島がありますが、あそこにも小学校があったりして、そこの青年が中心になって記念の運動会をやった時でした。その時は、馬乗り体操もありました。今の組み体操のことですね。歩き競争や相撲もやりました。それを見てそこで一週間すごしました。それからは、おじさんたちに連れられて、ひと夏に一週間ずつ、宜名真（ギナマ）、奥（ウク）、伊江（イイ）、楚洲（スシ）、我地（ガヂ）、安田（アダ）、安波（アハ）、川田（カーダ）、平良（テーラ）。この九か部落を今年はどこへ行くといって一週間ずつ行っていました。二二、三歳でやめるまで、国頭（沖縄北部）の九か部落を一週間ずつ見て帰ったわけですよ。

沖縄に行った時に食べるものといっては、魚の汁と御飯だけでした。女は連れていきません。行っても向こうの島の人とはあまり交流しませんでした。酒も飲めと言わんし、それにあの酒は飲まれないんです。今ここに沖縄泡盛のとっくりがありますが、これは後から来たものです。

今なら旅費をもっていくところですが、そこを見物がてら追いこみ漁をして魚を捕って、それを売って宿賃をつくったんです。宿は決っていなくて、行ってからよさそうな所を頼むわけです。宿といっても、たいていは物置小屋です。雨の日の薪用に山の木を切ってきて束にして積んである薪小屋を借りたのです。方言でクラと言っていました。捕った魚を小屋の主にあげれば、そこを借りて薪もいくらでも使いなさいといってくれるんです。タキヒチン（薪賃）として魚をあげるんです。そうやって一週間ずつ滞在しました。泊って食べる米はトーマイ（唐米か）という味のないサラサラしたお米が安かったのでそれを買いました。自分たちが持っていった小さい鍋でそれを炊いて食べました。必要な現金は魚を売って手にいれていました。

こちらには糸満の漁師は全然こなかったです。沖縄の人が一二、三歳の子供を金を払って借りていくのは見ました。昔は親の生活が貧しかったから。

――いわゆる「糸満売り」ですね。

交際と結婚

伊平屋島に向かった岩の所に五、六名座って男女で遊びました。夕方八時に御飯食べてしまったら一二時まで歌して遊んだものです。

木綿糸を買ってきて、沖縄から藍を買ってきて、糸を蒸してかすりの着物をつくりました。かすりの着物をトゥイキギヌといいます。一番いい服を男女ともチュラギヌといいます。

結婚の時に夫につくってあげる着物、フトゥムチギヌ（意味は夫を持つ着物）というのがありました。結婚の時には、娘に箪笥（たんす）か、それが買えない時にはイペという長もちのようなもの、そして、バシャヤマ（糸芭蕉の畑）をもたせてやります。親が財産として分けてやるものです。さっきもお話しましたように、バシャッタイといって、お金で分けることもありました。ナチクダーという身につけやすい着物もありました。

ものの値段

あの当時はそのトーマイというおいしくないお米が一升で、さあ二九銭だったか。子ども時代、卵ひとつが二厘。厘というお金はごらんになったことがないでしょうが、穴あき銭でした。それから、当時の値段で魚一斤（六〇〇グラム）が一〇銭から二〇銭ぐらいでした。当時は物価が安かったですよ。魚の種類によって値段は違わなかったんですね。追いこみ漁の魚だから味もそう変らな

いです。焼酎が一升で二〇銭ぐらいでしたか。

仔豚も売りましたが、一頭二円から三円でした。これは計りにかけないで、見込みで値段を決めるんです。与論島内の人が買いにきました。

沖縄の国頭からは牛や豚を買いにきたり、またこっちから持っていったりしていました。わたし等の年配ではバクリョウ（博労）はしていません。

物と物の交換ですか。そういうことはしなかったです。すぐお金で売って、欲しいものはお金で買って。滞在が一週間ずつでそう長くはなかったですから。

わたしが昭和一九年に月二〇円が区長の給料でした。米一升ではいかがかと言われましたが、わたしはお金を選びました。一番後では一八〇円の月給になりました。明治のころまでは米一升が人を使う時の月給でした。

わたしが少年時代は自分の親戚や近所のひとを頼んで畑を打ったりいろいろな加勢する時は、ただで頼んでありがとうといって昼御飯、夕御飯、焼酎を呑ましました。ダリヤミ（疲れ直し）をしてもらいます。ただで頼んだんですよ、知っている人だから。女の人なら夕御飯の代りにおいしいお茶うけなんかあげてね、これは気持ちですから。

戦争中の暮らし

昭和一九年四月、各字から五、六名ずつが出て、ひと月ずつ徳之島に行って飛行場をつくりました。奉仕隊といって行きました。朝ごはんには天井が映って見えるようなお粥を炊いてね。

――菊さんの『与論方言集』に「ティンジョー　ハガ　マイ」として、天井の影が碗に映るような水っぽい粥ということばが載っていますね。

そうそう。昼は小さい、虫つきのまじった芋を煮たもの三つぐらいでした。わたしは体が小さいから一番ちいさい芋をもらいました。夜もお粥で、おつゆがつきますが、カンダン（甘藍、キャベツ）の堅い下葉に牛の脂を入れたものぐらいです。

昭和一九年七月に、与論中学校が接収されて、五三名の兵隊が駐屯してきました。ここは空襲だけでしたが、飛行機が二つずつ並んで襲ってくるのがきつかったです。与論島では一〇戸ぐらい焼けました。この同じ組内でも三軒の家が焼けました。そして、B二九がずうっと北の方へ飛んで行くのがよう見えよったです。

わたしが、二度めの奉仕隊に行くために船に乗ろうとしていたら、その時の村長さんで叶という先生あがりの人から、与論村の区長になれといわれました。わたしなんか、尋常六年を出ただけの無学でとてもできません、といいましたが、「島から出るもお国のため、残るもお国のため」と諭されて、小麦粉一袋といっしょに船から降ろされました。三日後に区長の辞令が出ました。戦後は、アメリカから毛布などもただで配付されました。これは組で分けました。不足の時はくじ引きをしました。区長の仕事としては、道路掃除をさせることと屋敷の清潔検査が毎月ありました。

昔の農業・昔の稲

稲作は、昔はね、前もって九、一〇月には田の梳き換えをしてだらだらして（どろどろになるまで）やりました。フーダイという鋤で梳きました。水が漏らないようになります。ターシキフナシ（田をすきこなす）といいました。

サトウキビの刈り取りが一月から四月ですから、それが終わるころの旧の四、五月に田植えをし、六、七月ころ刈り取ります。田植えは男も植えました。三か月ほどで収穫できます。

収穫したら、藁を編んで俵をつくって、籾を三斗ほどずついれよったです。俵が多いうちは家の表の真ん中に積み上げて、家族がその周りに俵を抱くようにして寝ました。鼠を防ぐためです。うちの親は毎年俵の三〇俵ずつ米を作りよったですね。高倉は、ここではジョーノーグラ（上納蔵）といいよったです。ここから稲を引き下ろして月給を払いました。

籾摺りの歌がありました。二人で両側から臼を引いて回転させて「モミスリセーリー」と歌ったものです。米を搗いて白米にする時は、歌のように相互にことわざを一句ずつかけていきます。イヒ、イヒと相の手をいれて。「うちだせ　うちだせ　誠の　言葉を　うちだせ」とかいいながら息をあわすんです。

昔の稲は、ヒゲの長さ二寸弱、高さはわたしの背の高さほどでした。熟したら竹のクダバシ（管箸）でこき落とします。センバコキが来た時は、ハナクダ（金管）と呼びました。

昔の稲の品種名ですか。くわしいことは忘れましたねえ。そうそうクロフ（黒穂）というのがありました。これは糯米でしたからあまりたくさんはつくらなかったですよ。

献奉の由来

酒を方言でサイといいます。正月には、男も女も三つ重ねの大盃で酒を飲む習慣でした。方言では、ミカサビザイ（三つ重ね酒）と呼んでいましたが、この昔からのしきたりを、教育長をしておられた益田元甫（げんぽ）先生が、与論献奉と名付けて、よく話をしたり、物に書いたりして、今では、盃を回す習慣を献奉と呼ぶようになっているんですねえ。

焼酎は自分で炊いていました。サクバという所に里小屋を建ててこっそり酒をつくりました。その後沖縄焼酎を商売人がとって売るようになりましたが、こっちの黒糖酒よりも度数が高かったです。焼酎がはいったオキナワドゥックイ（沖縄とっくり）を正月前に一斗買って来ていました。こちらでも酒はつくったんですけれどね。家の床下には焼酎を炊いた道具がありますよ。麹を入れて夏なら一週間、冬は七日から一〇日ほどかかります。水を入れ、砂糖を入れて炊きます。蒸留した

一番目に出てくる酒は火をつけたらパッパと燃えますよ。これは、アワモリといいます。二番目もようやく燃えます。三番目をとって一番目、二番目と混ぜます。もし四番目のも混ぜれば二五度ほどになります。これは田植えのダリヤミ用に飲みました。焼酎は年に一回炊いて詰めておきます。一斗どっくりぐらいのものに入れます。私が焼酎の免許をとって三〇年ほどになります。

家を建てる時

三〇歳ぐらいの時に、分家しました。本家は曲った道をたどっていけば一〇〇メートルほどはなれた所にあります。大声出せばとどきますけれど。自分の家をもってからは、青年時代のように沖縄へ出かけることはしませんでした。

わたしが分家して家を建てる時の話です。野口というボージ（坊主、神官のこと）をお願いして儀式をするんです。まず、ここに家を建てようと思うまわりの四つの隅にデーク（ダンチクというイネ科の植物）を立てて注連縄をまわします。その四つの隅に三本ずつ線香を立てて四か所同時に火をつけます。それが全部きれいに燃え上がればそこは上屋敷、倒れるとだめ屋敷。そんな時にはそこから引き返してまたどこかに建てて、今度うまく燃えあがれば、そこが上屋敷になります。わたしの場合はここの空き地が上等の屋敷だったんです。ボージは線香を並べて立てて、トートト、

トートト、トートトとお祈りしてから、そこをボージが線香の燃えつきるまでついてまわるわけです。で、それが倒れなかったので、「はあ、上屋敷」といいました。

その四隅に囲まれた場所の真ん中でなくて、少し左側に寄せた所に門を作ります。門からまっすぐ家に入るのはよくないといいますね。だからごらんなさい、この家も台所の向こうが門になっています。デークを立てて決めたんですよ。そしてここがウマヌホー（午の方）といってまっすぐの所になります。ウマヌホーに向けて家を建てます。だからごらんなさい、ここの住家はみんな南の方を向いています。出入りの都合で東向きになっているところもあるけれど、北向きの家というのはぜんぜんありません。北はグショー（後生、あの世）の方角です。北を向けるのは、グショーヤー、つまり墓場なんですね。

家の表の一番前には神棚があります。これは、ジヌカミダナ（地の神棚）とか、ジヌカミドゥク（地の神床）といいます。それとは別にカミドゥク（神さまの床）をつくります。昔も今も家を建てるときには必ず二つ作ります。ジヌカミとは地面の神様です。そして、ジヌカミが家の神様を生まれさせてくださるわけです。

あたらしく家の神様が生まれる時は、ジヌカミに「ここで、よか所で生まれたからよか成功させて下さい」と島言葉でお願いしてここに祀ります。最初は神棚にまだ神様がおられないから祀らんわけです。オヤカミがあるところに子が産れた、孫が産れた。成功させて長生きさせてくださいとここから祈るんです。

デークがきれいに燃えて上屋敷となったら、最初に、そこに供えした時にはそこのジヌカミをたかめる、おがむわけです。その次には自分の先祖を。さっきも言いましたように、家には必ず床を二つ作ります。向かって左がウフトゥクと言って大きな床を低く作り、向かって右手には、トゥクガマ（小さな床）を少し高く作りつけます。両方あわせて二間の幅に作ります。どこの家でも、たとえ祀る先祖がなくてもこういうのをつくっておくわけです。分家したらそこに住むでしょう。子供をワラビ、大人をウフピチュといいますねえ。だからウフというのは大きいということです。

ガジュマルをグショーバナ（後生花）といいます。そして、十五夜のシヌグの祭という時には子供が家を祓うのにこの木の枝を振って使ったですね（九一ページ写真参照）。魔ものよけには、昔はデーク（ダンチク）もよく使いました。

建材は国頭から

この島には木がありません。モクマオウの木は二〇年前に来たものです。わたしが小学校へ通っていたころはまだ道を歩いて身体に触れるほどは木があったんですが、それが畑のじゃまになるからと切り倒されて、今ではほとんどありません。いずれにしても、建材になるような木は与論島にはありません。

使う材木は、イク（モッコク）などです。材はみんな沖縄からです。材木は与論島にはないですよ。だから、かならず沖縄から持ってこんと家は建てられません。わたしが小さい時はくり舟で行った。前もってお願いしておけば山原船（ヤンバルシン）で持ってくる場合もありました。また、むこうで材木を卸して商売する人もいたのでそこから買うこともありました。わたしがくり舟で行った時は、三人くらいで行きました。漕ぐのは一人でも漕げるけれど、材木を乗せたり降ろしたりするから。こちらの人は、近いから国頭の北の端の奥の部落へ行きました。行ってから、山の木の係に頼んで切ってもらったんです。また材木をあらかじめ切ってちゃんと準備しておいて、それをひとつの商売みたいにしてる人もいましたよ。

材木は、わたしより前の代の人は交換もしていました。国頭から豚買い、牛買いに来たので、その人に、家をつくるから材木を持ってきてくれと頼むこともありました。しかし、大方は現金だったな。わたしのころにはもう現金ばかりでした。

大東亜戦争の後は、南部地区と北部地区に別けられて鹿児島へは密航しなければ行けないことになりました。藤田と永という二人の人が、くり舟で国頭の奥へ行き、材木をとってきていました。これは、昭和二九年に奄美が沖縄と分けられるまでは続きました。また、奥あたりから髪をきちんと鬢づけ油で整えた人が来ていました。商人というよりも、知りあいに頼まれて材木をもってくる人です。皮をはいで角材にして、何尺と測って切ったものを持ってきました。

舟づくりも沖縄

くり舟は、大きいよ。もとはマーキといって大きな木を彫ってつくりました。マーキとは、特別の木の名前でなくて、普通の木という意味です。沖縄の人が造りました。それを沖縄で買ってきたのです。のちには板で造って油を塗った舟が出て、さらにイトマンブネ（糸満舟）という軽くして漕ぎやすい舟も出ました。当時の与論島には、自分で舟を造る技術はなかったんです。

どこまでも正直に

わたしは、区長の仕事を昭和一九年から昭和二八年まで一〇年間勤めて、その後は長く民生委員をしました。その表彰状をこうして見える所に置いてあるのは、自慢のためではなくて、子どもや孫たちに、お金にならないようなことも大切にして、どこまでも正直に、人から信頼されるような生き方をしてほしいと願っておるからです。

本稿は、屋久島の雑誌『季刊生命の島』三八号（一九九六）を改変しました。

伝承の中の生物たち——与論島から与那国島まで

安渓遊地・安渓貴子

わたしたちは、一九七四年から、人と自然の関わりの知恵を求めて、奄美・沖縄の島々を歩いています。島の方とよもやま話に花をさかせていますと、島びと自身が厚い記録をつくっておられることを知ったり、ときには「思いもよらない生き物」の話に出会うことがあります。

与論島のグージャーワンサマ

二〇一七年一一月に、与論民俗村の菊千代さんを訪ねてお話をうかがったとき、グージャーワンサマという生き物のことを聞きました。以下は、菊さんのお話の抜粋です。

与論島では家を建てるような木がないから沖縄から手に入れます。建てた家に、たとえ一本でも山原（ヤンバル、沖縄島北部）からの新しい木が入っている場合は、できあがった家で二人が組に

なって次のような儀式をします。

二人のうち一人は中にいて、一人は外で米でつくった神酒を持って、家の周りを三周します。「へいへい、シンジュ　マンジュ　ケンジュ、わたしの住むところがありませんからここに泊めて下さい」と外から頼みます。すると、中の人が「せっかくですが、いまここには、グージャーワンサマがのたうち回っています。あなたの住めるところはありません」と答えるんです。外の人は家の四つの隅をそれぞれ三回ずつまわって「ここに私の住むところはないか？」ときいて回ります。

グージャーワンサマは鯨と鮫（さめ）のことです。家の中で鯨や鮫が潜ったり浮き上がったりしてあばれているからあんたが入る所はないよという。これは、他所から来た霊に「入れてあげない。帰って」という儀式なんです。中に入っている人は口にお粥をふくんでぷいぷいと三回吹きかけます。

本書に収録された喜山康三さんのエッセー（八ページ）によれば、「グージャー　ワンサマ　シンパッタナゲーリ」というのだそうです。グージャーが鯨だというのは、八重山でも鯨をグジラなどと発音しますからわかりますが、ワンサマがサメなのでしょうか。これについては、私たちと一緒に与論島を訪ねた沖縄大学の盛口満さんが、くわしく先行研究を調べて、屋久島・トカラ・奄美と沖縄島にかけての屋粥儀礼で、鯨・鰐・鮫などの、海にまつわる恐ろしい生き物の力を借りることを明らかにしました。喜山さんが本書三三ページで、一七七八年の大津波被害と関連すると考えられる与論島への移住の歴史の中で、深いつながりがあると述べておられる沖縄の平安座（へんざ）島では、

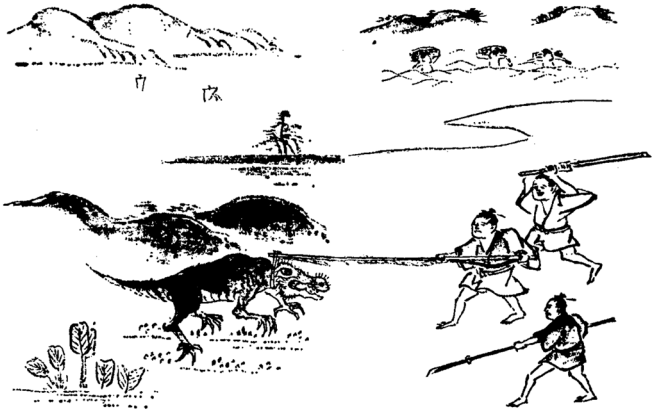
茅葺きの屋根ふきとどめの式に、屋敷の中に水をまきながら、次のように唱えるといいます。「（前略）ウーネー、クーネー、マーウー、チャーウー　北の海の鯨わいさば　潮（シュー）ど吹つる　泡ど吹つる　徳や内　鬼や外」。全体としてかなり印象はちがいますが、島ごとの伝承をたんねんにたどっていくと、与論島の唱えごとの鯨のあとのワンサマは、もともとは鰐鮫（わにざめ）のことだったとわかります（盛口満、二〇二一）。このように、島ごとの言い伝えや古い儀式の中にも、島と島をつないだ人々の移動と交流・交易の歴史がきざみこまれているのです。

西表島の「水鯖」とワニ

八重山では、新築の家を清めるために、海の怪物の力を借りるという例は知られていません。与那国島では、家づくりのために必要だった、材木や、竹や、石や土をとらせていただいた代償をカミガミに支払う儀式をしなければ、いくら大工への支払いをすませても、その家に住むことはできません。流木を使うことを、そこに悪霊がついている可能性があるために避ける与論島とは異なり、西表島西南部の網取村（アントゥリ、一九七一年廃村）では、家の完成の祝のヤータカビ歌の中に、浜に流れ着いた大木から一軒の家を建てるという物語が歌いこまれています（山田武男、一九八六）。大きなサメのことをサバといい、ワニについての詳しい伝承もあります。例えば西表

島西南部の、明治四四年に廃村となった鹿川（かのかわ）村の人々が魚を捕りに出かけた時、サンゴ礁のくぼみにヤモリの形をした大きな怪物がいるのを見つけたという伝承があります。魚を酔わせる木の皮をつぶして入れ、しばらくして銛で突いてみたら立ち向かってきました。村人たちは慌てて岩の上に逃げましたがそこで追い詰められてしまいました。岩を投げ、大久（だいく）という名前の力持ちの村人が棒で叩き、ひるんだところを鱗の間に銛を突き刺してようやく仕留めました。腹を割いてみたら卵が入っていたのを毒だという人もいましたが、年寄りが食べてみたら美味しかったそうです。村にいた旅人がこれはワニという動物だと教えてくれました。

実は、それまでにも鱗のある大きな動物が寝たあとがあちこちの海岸の砂についていたのでした。もともとは西表島西部を流れる浦内（うらう



『南島雑話』（奄美市立奄美博物館所蔵）より　住用・内海の駝竜（だりゅう）

『南島雑話』（奄美市立奄美博物館所蔵）より

ち）川上流の聖地マリユドゥの滝壺にいたものだったのです。古文書にも、ここには「水鯖」という怪物がいて、立ち入る日取りを選ぶなど行動に気を付けないと、命に関わると記されています（安渓遊地、二〇一一）。

これは、フィリピンあたりに生息するイリエワニが、海流に乗って北上し、西表島に定着していたものと考えられます。幕末に奄美大島の住用で捕まったものが、名越左源太（なごやさげんた）の『南島雑話』の中に絵入りで記録されていて、大型爬虫類の専門家である富田京一さんの鑑定では、イリエワニの特徴がよく描かれているといいます。実は、ワニは、八重山でも人々に広く知られた動物で、西表島東部には、ワニとの戦いに勝ったカエルたちの物語があります。また、竹富島の私設博物館・喜宝院蒐集館（きほういんしゅうしゅうかん）には、順風と航海の安全を願う風車が種々展示されていて、その中で最高位の役人用のものはイリエワニの形をしています。

沖縄島以北で、材木についている木の霊を祓う力のあるものとして、鯨とともに並び称された鰐鮫でしたが、与論島のワンサマは、儀礼を行わなくなるにつれて、そのもともとの意味が忘れられ始めたらしいことがわかります。実際にそうした儀式を行ってきた方々がご健在の間に、きちんとした記録をつくっておくことの大切さにあらためて気付かされます。

ザン（ジュゴン）・神の魚・大津波

いま沖縄の辺野古周辺で絶滅が心配され、八重山で再発見の兆しがあるザン（ジュゴン）。琉球王朝の時代、八重山の新城（あらぐすく）島では米の代わりにジュゴンが税でした。明治一二年、琉球王国が滅ぼされた後、王族だけの食べ物という縛りがなくなり乱獲が続いて、明治末には八重山では絶滅したといわれています。しかし与那国島で生まれ育った女性は、毎年一度六月ごろ子連れのジュゴンがどこからかやって来るのを拝む習慣が島にあったと語り、子どもを連れて泳ぐその姿を描き残しています。それも、一九六〇年代に入って姿が見えなくなったといいます。台湾に生き残っているジュゴンが一一〇キロの海を越えた与那国島まで来ていたのかもしれません。八重山と台湾のジュゴン個体群の間に、与那国島を中継地点とする遺伝子交流があったかどうかというのは、今後のジュゴンとその環境の保全生態学にとっても興味深いテーマです。

西表島西部の干立（ほしたて）村でとれた大きな魚が「海にもどしてほしい」と口をきいたことがあります。三人の男たちは、カンヌイユ（神の魚）とも知らずに、とれた魚を浜辺の火の上のアマダ（燻製棚）の上であぶっていました。夜中になって、火の番をしていた男は、海がゴーゴーと鳴って、頭に海藻をかぶった白い姿のものが海から出現するのを見ました。「シサレーシサレー（おーい）、海に帰

れるように波をあげてやろう。一日（ついたち）潮の高さぐらい波をあげたらそこから降りられるか？」この問いかけに、火の上の魚が「いやいや一日潮ではあまり大きすぎて島中の人がみんな死んでしまいます。五日潮くらいあれば泳いで海に戻る事ができます」と答えるのが聞こえました。この問答でナンヌリ（津波）が来ることを悟った男は、寝ていた二人の仲間をたたき起こして、慌てて浜の背後の高い崖によじ登り命拾いをしました。浦内川の河口も変わるほどの大きな津波は、このアマダを数キロも山奥に押し流したのです。その場所はいまもアマダウチ（燻製棚が落ちたところ）と呼ばれています。一七七一年旧暦四月に八重山と宮古を襲って、当時三万人いた八重山の人口のうちほぼ一万人を溺死させ、その後の人口が一万人まで落ち込むきっかけとなった、いわゆる明和の大津波の伝承かと思われます。この他にも、津波の伝承が地名に刻まれた例は少なくありません（西表島の地名と生物文化データベース）。数百年に一度のペースで起こってきた大津波は、この本に収録した佐藤為宜志さんのような、九〇歳を越える方にうかがったとしても、個人の生涯の経験だけでは継承が困難です。歴史に埋もれた自然災害とその中での先人の歩みを、世代を越えて言い伝え、未来の世代に警告し続ける仕組みを作り上げることが大切であると考えられます。

ガラッパ、ケンムン、キジムナー

本州の池や川にすむカッパは、通常その分布の最南端はトカラ列島とされ、屋久島ではガーッパ、トカラではガラッパなどと呼ばれています。生物地理の渡瀬線を境に、北はカッパ・ガラッパ圏、南はケンムン・キジムナー圏にほぼ分かれているといえそうです。ただし、北との太いパイプがあった喜界島だけは、ガラッパ圏に属すると、盛口満さんに教えてもらいました。また、今から百年以上前の大正時代に、八重山までガラッパが漂着したことが知られています。西表島干立村の黒島英輝さんは、二度にわたってその姿を見、鳴き声を聞きました。西表島小中学校の東側の海辺で、バシャバシャと音を立てながら「ヒヒヒヒヒーッ、ヒヒヒヒヒーッ」と甲高い声で鳴くものがいました。いっしょに夜道を歩いていた先輩が「ガラッパだ！　あれと相撲をとらされて負けると二、三年しか命がもたんぞ」というのを聞いて、命からがら走って逃げ、その後長寿をまっとうされたのでした。

沖縄島では、ガジュマルやアコウなどの古木にキジムナー（島の北部ではブナガヤ）というものが住んでいます。子どものような体格で髪が長く赤ら顔であるといいます。よくいたずらをしますが仲良くなれば漁を助けてくれる存在でもあります。奄美諸島にもよく似たケンムンというものが分布し、やはりガジュマルなどを好み、海と人界を行き来します。奄美大島では生息密度が高かったらしく「ケンムンは実在するか」というシンポジウムが計画されたとき、存在を否定する論者が一人も見つからなかったためにこの企画は流れたといいます。東京大学教授（当時）で、日本生態学会会長もつとめた鷲谷いづみさんは、環境庁の予算で「ケンムン広場」なるものを構築し

て、地元の人たちや訪問客が、奄美の自然を記録し共有する仕組みを作ろうと努力されています。二〇一五年に鷲谷先生の宇検村でのシンポジウムに参加したとき、宇検村の小中学生が描いたケンムンの絵画コンテストがあり、その中に「スマホで自撮りをするケンムン」が描かれていました。ケンムンが子どもたちと同時代を生きていることにいたく感心させられたのでした。「ケンムン先生」の異名をもつ中山清美先生は、ケンムンの出没する空間が残された奄美を守ることの大切さを次のように強調されました。「島の人達が、畏れ、敬い、守って、残して、伝えていきたいものを、地域の人達が自分たちの遺産として、島遺産から奄美遺産にしよう、奄美遺産を観光に活かしましょう」。世界自然遺産に登録された今こそ、この言葉は、ますます輝きを放つものと言えます。そして、大島北高校では、「ケンムン先生」の遺志をついで、高校生たちが、島のお年寄りからの聞き取りを続け、その成果が冊子として刊行され続けています。高校生と指導される先生方とも連携して、類似の取り組みが広がるようにしたいと願っています。

そして、奄美のケンムン、沖縄のキジムナーに似た不思議な生き物は、従来分布しないといわれた八重山でも、与那国島のキディムヌのように、ひっそりと生息しており、中国大陸にも、済州島などの島々にもよく似たものが分布していますから、老若男女がつどえる、ケンムンサミットのような国際企画も、計画されてよいのではないでしょうか。

ミミズ・モグラはニラ（根の国）の使者

ここまで奄美沖縄の伝承の中の希少種や絶滅危惧種にあたるものばかりをとりあげてきましたが、普通種というべき、どこにも見られる生きものたちとの付き合い方の中に奄美沖縄の自然との付き合い方の独自性が現れている例を紹介してみましょう。

一九五四年、与那国島に生まれたN子さん（仮名）は、病弱であったためおじいさんの懐で育てられました。おじいさんの日課は港で出航する船を見送ることでした。よくよく目を凝らして、港を出る船から飛び降りる生き物がいないかを見極めるのです。もし、ネズミやゴキブリが一匹でも飛び降りたら、その船が沈む報せであるとして、大声で合図して船を呼び戻しました。このように生き物が人間界にとっての大切な報せを運ぶ与那国島の伝統の中で育ったN子さんが、赤ん坊の時まず覚えさせられたのが「ミミズ語」でした。ようやく這い這いをするようになった赤ん坊の枕元に土を入れた洗面器をおき、ミミズを数匹つれてきます。ミミズと過ごすことに慣れてくると畑に出ます。三歳ぐらいのとき、N子さんは、ミミズのようすを見るだけで「この大根は根っこが腐ってる」と言えるほどになりました。ミミズは、与那国の島ことばではディミミですが、これは、「地耳」という意味です。ニラ（大地の底）で起こっていることをまっ先に知らせてくれる、大切な生きものであることを名前が示しているのです。

ニラはニライカナイと同じ語源です。しかし八重山のニラは海の彼方の楽園というよりは足元の

大地を指す言葉であり「根の国」にあたります。与那国島では農業をはじめとして人間の生活の幸福をもたらす第一の存在として、ニラはニラガナチと尊称されています。

小学校に行く前のN子さんの家では、野生のジャコウネズミの仔を捕まえてきて大切に飼うという習慣がありました。方言でチンチラティと呼ぶこの生きものの世話をするのは、N子さんの役割。成長したジャコウネズミを野生に返す日には、一家でご馳走をつくり、お酒も飲んで盛大な祝いを座敷でとりおこないました。無事、人間界からふるさとの地下世界に帰ったジャコウネズミはニラガナチに対して、あの家では自分をとても大切にして育て、旅立ちにあたって祝いの御馳走してくれたこと、そしていつもニラガナチのことを褒めて大事に思っていることを直接に伝えてくれます。夜中に穴から顔を出して一声叫ぶのは、天上世界のティンガナチにも同じ内容を手短かに報告してくれているのだとされています。このようにして、大地と天からの恵みをより確実なものとすることができるのです。これは、アイヌ民族がヒグマ、シマフクロウを育てて、さまざまな土産を持たせてカムイ（神々）の国へ送るイオマンテの祭と同じ精神世界が琉球弧にもあることをはっきり示す貴重な事例です。与那国島で、N子さんは、ジャコウネズミを飼うだけでなく、ウミガメもしばらく飼って、海の神トゥーガナチに送ることもしていました。また、少年も、家族の応援を得て、リュウキュウツバメのひなを育てて、天上界への使者として、送り返すということが行われていたのでした（安渓貴子・安渓遊地、二〇一一）。

島はいのちの湧き出すところ

与論島では、人間を含む生命あるものたちすべてを「ヌチムチ」または「ヌチムチムヌ」と総称しています。確かめてみると、同じ言い方が、八重山の多くの島々にもあることがわかりました。明治生まれの人たちは、与那国島のことを「ヌてぃヌカーラ」とも呼んでいたとN子さんはいいます。訳すならば「いのちの湧き出すところ」というような意味です。

西洋からの考え方の影響で、人と自然が対立するものとして、分けられてしまう以前の、山川草木虫魚のすべてに共通して流れる「いのち」の環が、奄美沖縄の島々では、どのように巡っていると捉えられてきたのでしょうか。そして、その世界観に支えられた暮らしのありようは、島々を結んできた歴史的な人的つながりによって、どのような影響をうけてきたのでしょうか。そうした問いを、島々の記録と記憶をほり起こして、次世代に伝えていこうと努力しておられる地元のみなさんとともに探っていくお手伝いができれば、これにまさる喜びはありません。現在進行中の取り組みとしては、西表島の地名と生物文化データベース、与那国島の生物文化データベースなどのウェブページをご参照ください。

今後、こうした見方で、琉球弧の南に広がる島々に視野を広げるとき、調査する側とされる側という対立ではなく、いろいろなしがらみからともに自由になって、島の昨日・今日・明日を語り合うというあらたな水平線がみえてくるのではないかと夢見ています。

奄美では「ムン話」などと言われる、もののけの話などは、自然科学の研究とは無関係のようですが、本書の喜山さんの報告からも明らかなように、島の言い伝えに深く学ぶことなしに、島の環境と文化を理解して、未来への提言をすることなどは不可能です。このたび北大スラブ・ユーラシア研究センターの岩下明裕教授の尽力で復刊される、与論島の珠玉の伝承『無学日記』（池田福重、二〇二二）などからも島のものの見方を学ぶところが大です。

言い伝えと自然科学の関連について、もうひとつだけ具体例をあげておきます。与那国島のN子さんは、島のクンマ（貢馬）と呼ばれる一地区にだけ、ジャコウネズミと似ているけれど手足がシャベル状になった別種の生き物がいたことを覚えています。これは、太陽にあてるとすぐに死ぬので、ジャコウネズミとちがって家に連れてきて飼うことはできませんでした。尖閣諸島には固有種センカクモグラがいるのですが、これまでいないとされていた与那国島にもモグラ類が分布することが確認されれば、生物地理学の定説を書き換える大発見につながるはずです（安渓貴子・安渓遊地、二〇一一）。

引用文献

安渓貴子・安渓遊地「与那国島のものの見方・考え方」『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社（二〇一一）

安渓遊地「ワニのいた川――西表島浦内川の昨日・今日・明日」『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社（二〇一一）
池田福重著・喜山康三編『無学日記』共同文化社（再刊、二〇二二）
盛口満「琉球列島の島々における建築儀礼上の海の動物たち」『地域研究』二七：六九-七九、沖縄大学地域研究所（二〇二一）
山田武男著・安渓遊地＋安渓貴子編『わが故郷（シマ）アントゥリ――西表・網取村の民俗と古謡』ひるぎ社（一九八六）おきなわ文庫から電子書籍として再刊

引用ウェブページ
与那国島生物文化データベース　https://dunanmunui.wixsite.com/my-site
西表島の地名と生物文化データベース　https://aiiriomote.wixsite.com/mysite

本稿は、安渓遊地「伝承の中の生物たち―八重山を中心に」『科学』八三巻七号（二〇一三）をもとに大はばに書き加えたものです。

〈写真提供〉

稲見輝男（表紙，p.35, p.49, p.80-89, p.111, p.126　撮影地：昭和 30 年代の与論島や沖永良部島など）　タイラジュン（p.45, 裏表紙）

〈執筆者プロフィール〉

喜山 康三（きやま・こうぞう）

与論町議会議員 5 期目、与論島の方言・地名・民俗・歴史・戦争記録と調査をしています。池田福重著『無学日記』編集出版。他に趣味として DIY とサンシン弾き。

高橋 そよ（たかはし・そよ）

博士（人間・環境学）。琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科、准教授。専門は生態人類学・環境民俗学。サンゴ礁での漁撈に魅せられ、素潜り漁師に弟子入り 22 年目。主な著書に『沖縄・素潜り漁師の社会誌――サンゴ礁資源利用と島嶼コミュニティの生存基盤』（コモンズ）など。

盛口 満（もりぐち・みつる）

高校教員、フリースクール講師などを経て、現在沖縄大学教授。専門は理科教育。教員をしながら、一般向けの自然に関する本を執筆。主な著書に『琉球列島の里山誌』（東京大学出版会）、『めんそーれ！化学』（岩波ジュニア新書）、『ものが語る教室』（岩波書店）など。

安渓 貴子（あんけい・たかこ）

家族農業の実践のかたわら、生態学を研究。微生物研究で理学博士。山口県内の大学や看護学校で生物学・文化人類学の非常勤講師。主な著作に『森の人との対話』（東京外大 AA 研）、『ソテツをみなおす』（ボーダーインク）など。

安渓 遊地（あんけい・ゆうじ）

地域学・人類学を研究。アフリカの物々交換市場の研究で京大理博。山口県立大学名誉教授。山口県内の大学で文化人類学・地域学を教える。主な著作に宮本常一との共著で『調査されるという迷惑』（みずのわ出版）など。

LINKAGE ブックレットシリーズ

島と語る 01：琉球弧・与論島

2022年1月31日　発行

編　　者　　高橋そよ

発　行　所　　大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所 LINKAGE プロジェクト
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
Tel. 075-707-2100

印刷・製本　　株式会社プリントパック
装丁・DTP　　松本太郎（散歩社）

Edited by TAKAHASHI Soyo, 2022
ISBN 978-4-906888-90-0　　Printed in Japan

本書のコンテンツは、Creative Commons CC BY-ND 4.0 国際のライセンスのもとで提供されます。

The Research Institute for Humanity and Nature
総合地球環境学研究所 LINKAGEプロジェクト

ISBN 978-4-906888-90-0